# 第二節　沖永良部島の先史時代

## 一　概　説

沖永良部島は奄美諸島のなかでも、先史時代の調査については、やや遅れた地域で、初めて遺跡が発見されたのは、昭和十一年であった。『人類学・先史学講座』第十六巻「南島の先史時代」(三宅宗悦) によると、「昭和十一年鹿児島市在住の宮田吉憲氏は、郷里沖永良部島を訪れ、和泊村畦布湾門(アゼフワンチョ)に貝塚のあった事を自著「大島郡和泊村畦布之遺跡ト伝説」—謄写版本—に報じている」とある。その後、昭和二十九年、筆者は南島調査団に属し、同遺跡の試掘を行った。

昭和三十二年、九学会連合奄美大島共同調査(第三次)で、考古班(河口貞徳)は、分布調査と知名町住吉貝塚の発掘調査を行ったが、これより早く、金関丈夫博士は、人類学調査のかたわら、沖永良部島の石斧実測を行い、考古班に提供された。(昭和三十一年ごろ)

昭和四十七年には、鹿児島短期大学南日本文化研究所の主催した考古班(白木原和美・上村俊雄)による調査が行われた。

昭和五十七、五十八年には、鹿児島大学および沖縄国際大学によって、知名町スセン当遺跡と神野遺跡の発掘調査が行われる一方、同じく五十七、五十八、五十九年には、河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望らによって、知名町中甫洞穴の発掘調査が行われた。(二、三次は知名町主催)

以上が沖永良部島における、これまでに行われた考古学的調査の大略である。

沖永良部島で、今日までに、発見された遺物のうち、最も時代のさかのぼるものは、中甫洞穴で出土した爪形文土器である。縄文の草創期に比定されるもので、本島最古の土器である。

次に古い年代と考えられる土器は、同じく中甫洞穴から出土した、貝殻を施文具とする、連点波状文土器と呼ばれる土器である(15図)。轟I式土器の下層から出土



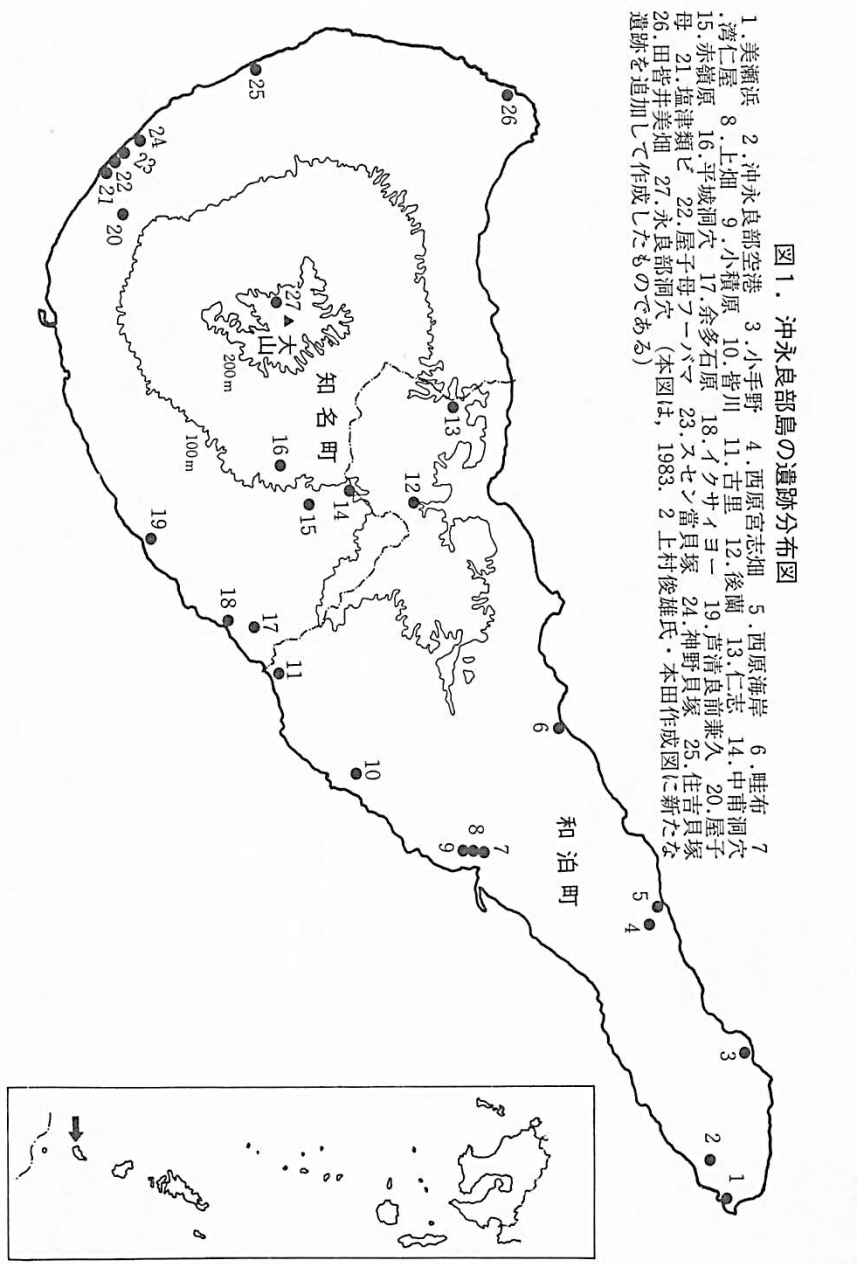



図1．沖永良部島の遺跡分布図

1.美瀬浜　2.沖永良部空港　3.小手野　4.西原宮志畑　5.西原海岸　6.畦布　7.湾仁屋　8.上畑　9.小積原　10.皆川　11.古里　12.後蘭　13.仁志　14.中甫洞穴　15.赤嶺原　16.平城洞穴　17.余多石原　18.イクサイヨー　19.芦清良前　20.屋子母　21.塩津瀬ビ　22.屋子母フーバマ　23.スセン当貝塚　24.神野貝塚　25.住吉貝塚　26.田皆井美畑　27.永良部洞穴（本図は，1983．2 上村俊雄氏・本田作成図に新たな遺跡を追加して作成したものである）

し、縄文早期ないし前期に該当するものと考えられる。この型式の土器は、現在のところ、他の遺跡からは発見されていない。

連点波状文土器の次に来るものは、赤連系土器ないし室川下層式土器と呼ばれる土器である。貝殻によって器面調整を施すもので、神野遺跡から出土している。宝島大池遺跡において、轟Ⅲ式土器と共伴出土したことから、その年代を推定できる。縄文前期末に該当するものと考えられる。

以上にあげたグループが古い時期の土器群である。その後に続く、縄文中期に該当する時期は、奄美全域と同様に、沖永良部島にあっても明らかでないが、若干の、この時期に該当するのではないかと思われる資料は存在する。

縄文後期に該当する時期については、面縄東洞式土器も、移入土器の市来式土器も、現在のところ発見されていないが、存在の可能性は十分にある。神野遺跡では南九州から移入されたと思われる、松山式土器が出土しており、市来式以前に、すでに南九州との交流があったことを示している。同遺跡では、面縄東洞式土器に続く、嘉徳Ⅰ式土器も出土しているのである。

宇宿上層式土器の時期については、宝島浜坂貝塚では、縄文晩期および弥生中期土器との共伴関係があり、宇宿貝塚では、弥生後期の土器と共伴している。一時期に特定することは不適当で、年代に幅をもたせることが必要であろう。沖永良部島では、住吉貝塚・小手野遺跡で出土している。

兼久式土器は、沖縄から奄美にいたる広域に分布する土器であるが、弥生土器および土師器との共伴関係が見られ、いくつかの型式に分類できるものと思われる。沖永良部島では、中甫洞穴およびスセン当遺跡から出土している。

沖永良部島において、現在、判明している遺跡の数は二十七カ所である。（図１）その分布状況を見ると、海岸砂丘地帯を主とし、若干、内陸部にも存在している。立地条件としての共通点は、湧水池が選ばれている、と言うことである。このことは内陸部の遺跡地の分布を見ると明らかで、いずれも段丘崖下の湧水地に立地しているのである。現在の集落分布を見ても、同様な条件で選地されており、古来「水」が重要な集落立地の条件であっ



たことを示している。

前節でも若干触れたが、市来式土器と轟式土器とは、南島に移入された、本土の土器のうちでも顕著なもので、南島式土器の編年を考える上で重要な意味をもっている。しかし轟式土器は幾型式かに分かれ、しかもその分類が明確でないために、比較する場合、不都合が多かった。そこで、次にその分類を試みたい。

### 轟式土器の分類

轟式土器の型式分類は、志布志町片野洞穴出土の土器について、層序に従って分類を試みたことがあるが、さらに同町鎌石橋遺跡・吉田町小山遺跡・吹上町黒川洞穴・加治木町日木山洞穴・熊本県宇土市轟貝塚その他の資料を参照して層序に従って分類すると、四つに分けられる。これを古い順に轟Ⅰ式・轟Ⅱ式・轟Ⅲ式・轟Ⅳ式と呼ぶ。（図２）

#### 轟Ⅰ式（図２―１～３）

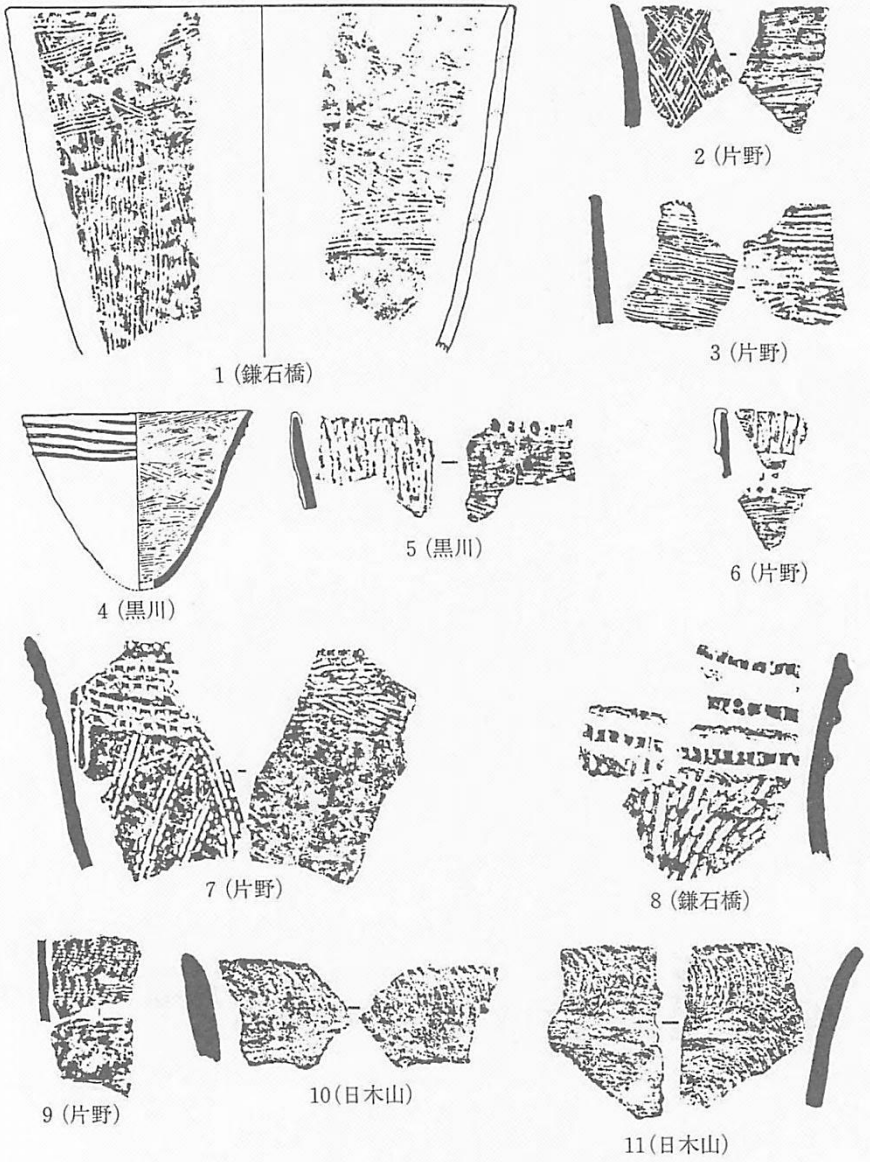
轟式土器のなかで最古と思われる型式である。鎌石橋遺跡では、鬼界カルデラ起源の幸屋火砕流の直下から出土する貝殻縁で器面調整した土器で、小山遺跡でも、同じく鬼界カルデラ起源のアカホヤ層（幸屋火砕流と同一時期）直下から、同類の土器が出土している。また、遠く大分県においても、下菅生Ｂ遺跡・桑木Ｇ遺跡でアカホヤ層の下から同類の土器を出土することが知られており、宮崎県北川内区内野々遺跡でも同様な層序で同類の土器が出土している。これらの土器が轟Ⅰ式土器である。器形は深鉢型で、直口が多く、口縁部がわずかに外反するものも見られる。底部は丸底または平底のようであるが、まだ完形を見ない。土器の内外面を貝殻縁で器面調整を行うが、さらにその上に、貝殻縁による格子目または曲線文を重ねるものもある。

轟Ⅰ式土器は、上にあげた遺跡のほかに、志布志町片野洞穴の最下層から出土し、片野Ⅰ式（河口貞徳）と呼び、日木山洞穴から出土したものは、条跟（じょうこん）文土器（樋口清之）と呼ばれ、轟貝塚から出土したものは轟Ａ式（松本雅明）と呼ばれている。

以上の状況から見て、轟Ⅰ式土器文化は、鬼界カルデラが大爆発を起こす以前に、九州一円に広く分布していたことがわかり、塞ノ神式土器文化が、九州全域に広がっていったあとを受けて、轟Ⅰ式土器文化も南九州を起点として広域化していったと推定される。

図２．轟式土器

轟Ⅰ式（１～３），轟Ⅱ式（４～６），轟Ⅲ式（７・８），轟Ⅳ式（９～11）






**轟Ⅱ式（図２―４～６）**

轟Ⅱ式は、轟Ⅰ式に後続する型式である。層序関係は片野洞穴遺跡・黒川洞穴遺跡で明らかにされている。土器の内外面を貝殻で調整し、みみずばれ状の凸帯で器面を飾る土器である（図２―５・６）。胴が張り、口縁部で外反する丸底の器形と、直口の深鉢形丸底の器形が見られる。轟Ⅱ式は轟式の代表的型式で、ほとんどの轟式遺跡から出土しているが、南島ではまだ発見されていない。

**轟Ⅲ式（図２―７・８）**

轟Ⅲ式は、轟Ⅱ式に後続する型式である。片野洞穴では轟Ⅱ式出土層の上の層に、鎌石橋遺跡では幸屋火砕流の上の第三層から出土している。土器の内外面を貝殻縁で調整し、さらに同じく貝殻縁による連点文を施し、刻み目凸帯を貼付（てんぷ）する土器である（図２―７・８）。

土器表面の貝殻縁による条痕がかすかに見られる程度のものもある。宝島大池遺跡では、赤連系土器とともに出土し、また片野洞穴では、貝殻条痕を地文とする曽畑式土器を共伴出土している。

**轟Ⅳ式（図２―９～11）**

轟Ⅳ式は、轟Ⅲ式に後続する型式である。片野洞穴の層序によって、轟Ⅲ式との関係が判明している。土器の内外面を貝殻縁で調整し、さらに貝殻縁によって、連続して弧文をジグザグに施す土器（図２―９～11）である。日木山洞穴出土の相交弧文土器（樋口清之）に該当する。

## 二　遺　跡

### (一)　住吉貝塚

住吉貝塚は沖永良部島の西端、知名町住吉金久の海岸にあり、松下植安・木下池実氏所有の畑地にまたがり、千平方メートルを超える平坦地である。遺跡直下の海岸には湧水が見られ、良い立地条件を備えている。

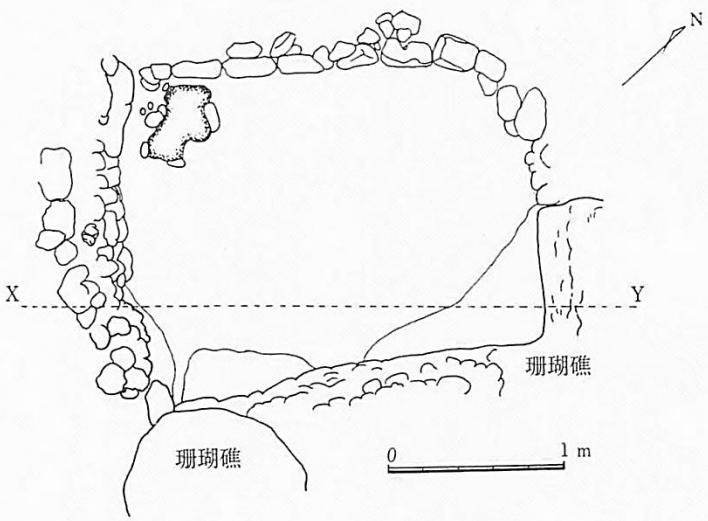
昭和三十二年八月十二日より同二十二日に至る十一日間、九学会考古班（河口貞徳）が発掘調査を行った。

その後、農地構造改善事業によって、遺跡は破壊されたが、なお残存している部分もあるようである。

**１　遺跡の状態**

表層（第一層）は、砂質褐色土層で、厚さが十四～二

図K．住吉貝塚住居址




十センチあり、遺物は包含していない。第二層は、粘質褐色混土貝層で、厚さは二十八～六十センチあり、中間にマイマイを主としたレンズ状、純貝層が挟まっている。上層との境は水平であるが、下層との境は北より南へ傾斜しており、この層は遺物を多量に包含している。第三層は、粘質礫まじり層で、厚さは二十二～四センチあり、遺物を包含している。第二層との接触面は北から南へ傾斜しているが、下部はほぼ水平である。第四層は、砂質褐色層で、ごく薄く、厚さは三～八センチにすぎず、遺物を少量包含している。住居址の床面をなしている。（図K）

礫まじり層の下に、宇宿上層式の時期の住居址が発見された。石囲住居址で、ほぼ長方形をなし、内側の各辺は縦二・四メートル、横一・八メートルである。北隅と北西辺は塊石を用いて石組みし、外側には根石を使用したところもある。東隅、東南辺、西南辺は、自然の珊瑚礁の面を調整したものである。したがって東南辺と東隅の壁は、他より著しく高い。床面は周辺二十センチ幅の部分を除いて、一面に灰に覆われ、西隅には縦四十センチ、横三十五センチの矩形（くけい）に近い炉址があり、周囲に点々



と小礫が配されていた。宇宿貝塚の石囲住居址に酷似するもので、この時期の住居址のひとつの形態と考えられる。

## 2　遺　物

### (1)　土器

土器は無文の宇宿上層式と、有文の下層式とが、混出する状態であった。

①　無文で口縁部の断面が蒲鉾状に肥厚し、胴部の張った丸底の壺形土器、および平底の甕形土器がセットをなすもので、いわゆる宇宿上層式土器であるが、出土した土器のうちで大半を占めている。

②　次に多いのは、器形は、①と同様であるが、肩部に細い隆起帯をもち、口縁部と隆起帯との間に沈線綾杉文を施したもの、および細隆起帯を縦横に施し、その両側もしくは片側に刺突文を連続して施し、これに細線文を配したもので、これらの土器には、犬田布式と喜念Ⅰ式の二つの型式の土器が含まれている。

③　鉢形の平底土器で、口縁部から頸部へ幾何学的文様を施したもので、嘉徳Ⅱ式に当たる。出土量は少ない。

④　深鉢形平底の土器で、口縁部に文様帯を有し、籠編みに類する押引文を施文する土器で、面縄東洞式と呼ばれる土器がごく少量出土している。

⑤　その他ごく少量であるが、横位に点文を連続施文したものや、やや幅をもった沈線を波状に施したものなど、沖縄出土の土器に類するものが出土している。

以上の土器の中では、①の土器が最も分量が多く、かつ大型の破片が出土している。次に、②の土器が多く、③の土器は少量で、④の土器は最も出土量が少ない。かつ③・④の土器は破片が小さく他から移動混入したものように思われる。したがってこの貝塚の主体は①・②土器と思われ、遺跡の時代も①・②の土器が示す時期と言えるであろう。

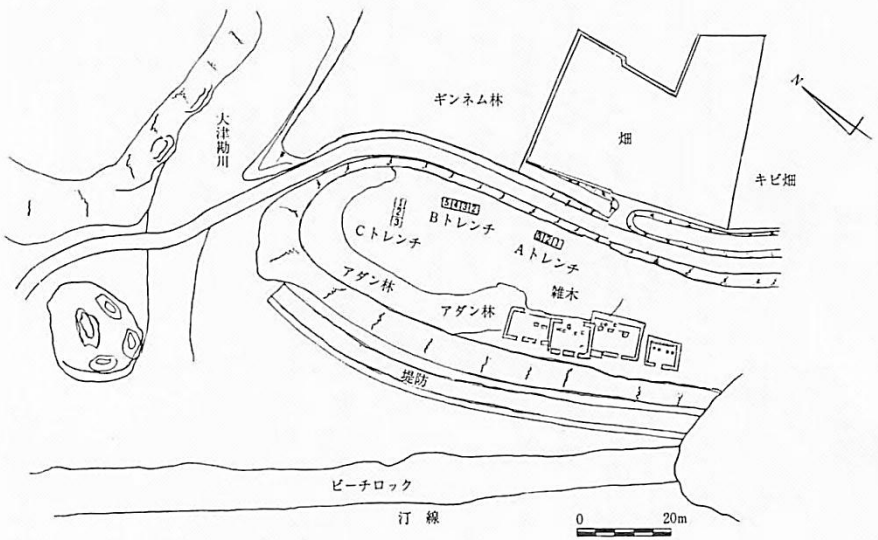
### (2)　石器

石器では、定角式石斧、半磨製石斧、矩形の小形磨製石器で一端に刃を付けたものなどが出土しており、地表採集および地主の耕作によって出土したものには、わりに薄い中形の半磨製のもの、乳棒状に近いもの、断面楕円形で刃部の幅が広く短いものなど、数個の石斧と槌石、石皿などがみられる。

### (3)　牙器および貝製品

各区の貝層から発見されている。猪の牙の両端に各々二カ所穿孔（せんこう）した装飾品、同じく骨に加工し一面を平らにすり磨き、一端に刻み目をつけ

図３．神野貝塚地形図（高宮論文より）




た棒状の製品、夜光貝の殻を利用した貝匙三個、同じく貝輪の破片三個などが出土している。

**(4) 自然遺物**　各区の混土貝層および貝層から獣骨、魚骨、貝類が出土した。獣骨はすべて猪で、宇宿貝塚出土の猪骨と同大で、南九州のものより小形である。林田重幸氏によれば、種子島・屋久島までは南九州と同様の大形のものであり、奄美大島は沖縄とともに小形のものが分布しているということである。

貝層は、ほとんどマイマイ類の単純な層であるが、少量の海産貝を混じている。面縄第二および第四貝塚においても、マイマイの単純貝層であったために、自然層ではないかとの疑いをもったのであるが、この貝塚においては木炭あるいは土器などの人工遺物を包含しているので、マイマイを捕食したものと考えられる。

## (二) 神野遺跡

神野遺跡は、知名町大津勘神野にあり、沖永良部島の南西海岸、太平洋に面する海岸砂丘に立地する。昭和五十五年二月、高宮廣衛によって発見され、同五十七年・五十八年に沖縄国際大学（高宮廣衛）によって発掘調査



が行われた。また五十八年には鹿児島大学（上村俊雄）も、平行して同遺跡の調査を行った。

### 1　遺跡の状態

遺跡地は、北は大津勘川を境界とし、西は海岸に面する堤防、東はサイクリング道路によって囲まれる小高い砂丘地である。発掘は、サイクリング道路よりのA・B・C三地点について行われた。

A・B地点は沖縄国際大学、C地点は鹿児島大学が担当し、それぞれトレンチによる発掘調査を行った。

Aトレンチは二×六メートルで、第一区は七層まで、第三区は八層まで発掘し、深さ三・七メートルに及んだために、壁面が崩壊し発掘もそれまでに止めた。

Bトレンチは、二×十メートルで、第三区は十一層、第五区は十二層に達し、深さ三・五メートルで地山を検出した。

Cトレンチは、二×六メートルで、全区第十四層に達し、深さ四メートルまで発掘して基盤の一部に及んだ。

Aトレンチでは、縄文後期該当の遺物が主体をなし、主として四、五層から出土した。七、八層以下の発掘が、壁面崩壊のために不可能で、下層の資料が得られなかったためである。

Bトレンチでは、さいわい地山まで完掘できたために、良好な結果が得られた。四～七層からは、主として縄文後期該当の遺物が得られ、九～十二層からは縄文前期末該当の遺物が出土した。

Cトレンチでは、これまた完掘が行われ、六層、八層、九層、十層、十一層からは、縄文後期該当の遺物が出土し、十三層からは、縄文前期末該当の遺物が得られた。

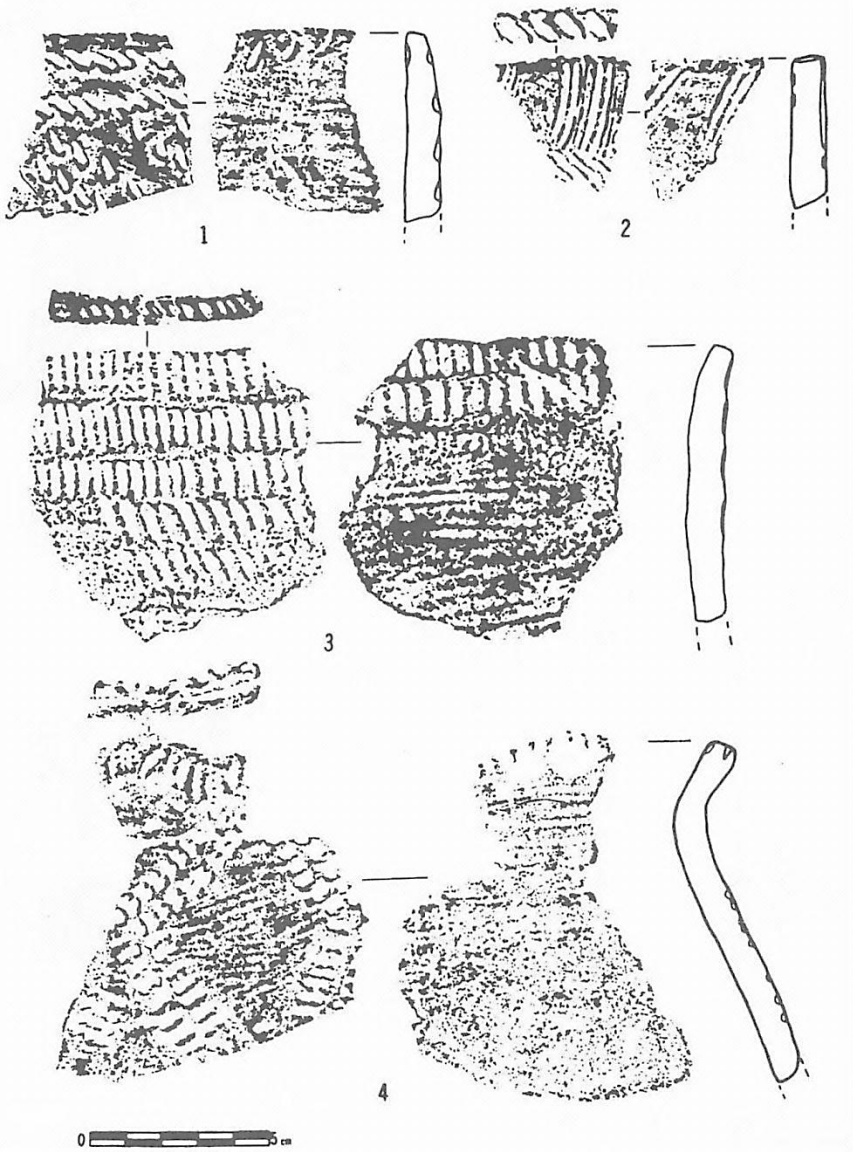
各トレンチの状況は、次に挙げるNo 1～No 3の層序表によって伺うことができる。

### 2　遺　物

**(1) 土　器**　土器は南島式土器を主体とし、少量の縄文土器を共伴出土したことによって、若干の時期的基準が得られ、また一方では、奄美の土器と沖縄の土器とが伴出したために、これまで推定の域を出なかった両者の関係が、共伴関係土器の時期を基点として、比較的に正しく対比できるようになった。次に、下層から出土した古い土器から順次述べよう。

**①　赤連系土器（室川下層式土器）**　各トレンチを通じて、最下層から出土する土器で、本遺跡で最も古いと

図４　神野土器　１・２―室川下層式　３―神野２類
４―神野３類（高宮論文より）






No.１　Ａトレンチ層序

| 層 | 土壌 | 厚さ | 遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| Ⅰ | 黄褐色砂層 | ２５～５０cm | 無遺物 | |
| Ⅱ | 暗黄色砂層 | ２０～２５cm | 攪乱層 | |
| Ⅲ | 黄褐色砂層 | ５０cm | 無遺物層 | |
| Ⅳ | 黒色砂層 | ３０～５０cm | 縄文後期該当 | |
| Ⅴ | 浅暗褐色砂層 | | 縄文後期該当 | |
| Ⅵ | 黄白色砂層 | ５０～７０cm | 無遺物層 | |
| Ⅶ | 紅白色砂層 | | 轟様式　１片 | 崩壊 |
| Ⅷ | 淡黒色 | | 室川下層式 | 崩壊 |

No.２　Ｂトレンチ層序

| 層 | 土壌 | 厚さ | 遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| Ⅰ | 黄褐色砂層 | ３０～５０cm | 無遺物層 | |
| Ⅱ | 暗黄色砂層 | １０～２５cm | 縄文後期該当 | |
| Ⅲ | 黄褐色砂層 | １５～２０cm | 無遺物層 | |
| Ⅳ | 黒色混貝砂層 | ３０～５０cm | 縄文後期該当 | |
| Ⅴ | 黒暗灰色砂層 | ４０～６０cm | 縄文後期該当　（松山式１片） | |
| Ⅵ | 暗黄色砂層 | １０～３０cm | 面縄前庭式　（面縄東洞式１片） | |
| Ⅶ | 暗褐色砂層 | ２０～４０cm | 面縄前庭式 | |
| Ⅷ | 黄白色砂層 | ４０～６０cm | 無遺物層 | |
| Ⅸ | 紅白色砂層 | ３５～５５cm | 3 区－(2 類)、5 区－(室川下層・2 類) | A-Ⅻ該当 |
| Ⅹ | 黄白色砂層 | ６０～８０cm | 3 区－(室川下層・疑縄文)、5 区－無遺物層 | |
| Ⅺ | 明褐色砂層 | ３～5cm | 室川下層式 | |
| Ⅻ | 赤色混砂層 | 5～１８cm | 室川下層式－３片 | |
| ⅩⅢ | 赤色地山 | ５０cm掘る | 無遺物層 | |

No.３　Ｃトレンチ層序

| 層 | 土壌 | 厚さ | 遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| Ⅰ | 黄色砂層 | ４０～４５cm | 無遺物層 | |
| Ⅱ | 淡褐色砂層 | １５～２０cm | 貝小玉　1 | |
| Ⅲ | 灰褐色砂層 | ３０～３５cm | 兼久式（少量） | |
| Ⅳ | 淡黄白色砂層 | ３０cm | 無遺物層 | |
| Ⅴ | 暗褐色砂層 | ２０～４０cm | 土器片・貝小玉・貝輪片 | |
| Ⅵ | 黒色砂層 | ４０cm | 伊波式（主）、嘉徳Ⅰ・Ⅱ式 | |
| Ⅶ | 白色砂層 | ３０～４０cm | 無遺物層 | |
| Ⅷ | 紅褐色砂層 | １５cm | 嘉徳Ⅰ・Ⅱ式、面縄東洞式 | |
| Ⅸ | 黒灰色砂層 | ３０～４０cm | 面縄前庭式・松山式的なもの | |
| Ⅹ | 黄白色砂層 | ３０cm | 面縄前庭式 | |
| Ⅺ | 淡黄褐色砂層 | ２０～３０cm | 面縄前庭式 | |
| Ⅻ | 白砂層 | ２０～４０cm | 無遺物層 | |
| ⅩⅢ | 淡褐色砂層 | ４５～５０cm | 土器大片　1 | |
| ⅩⅢ | 茶褐色砂層 | １０～２０cm | 赤連系（室川下層式） | |
| ⅩⅣ | 褐色粘湿土 | 基盤 | 無遺物層 | |

考えられる土器である。器形は深鉢形の尖底で、直口が普通でわずかに外反するものも見られる。器壁は厚く一センチ前後である。色調は暗褐色で、まれに茶褐色も見られる。貝殻で器面調整し、ナデ仕上げも行われる。文様は、篦（へら）状工具を用いて、羽状または「ハ」字状の連続文を、斜位または横位に施す。

この土器は南島に広く分布し、宝島大池遺跡では轟Ⅲ式と伴出し、最近（五十九年度）の面縄第四貝塚の発掘調査では、縄文前期末の春日式土器より下層から出土していることが判明した。このような層序から見て、縄文前期末の時期に該当するものと思われる。（図4―1・2）

**② 神野Ⅱ類土器**　Aトレンチ七層、Bトレンチ九層、Cトレンチ十三b層から出土している。深鉢形で底部は尖底と推定され、波状口縁土器である。器壁は厚さ一センチ前後あり、胎土は石英粒を含み、わずかに雲母も見られる。器面は貝殻によって調整され、外面はナデ仕上げを行ったものも見られる。文様は、口縁部から縦位または斜位の沈刻短線を数段にめぐらすが、下部で変化し、沈線で縁どりする部分も見られる。口縁部内面は同様な文様を二段めぐらしている。

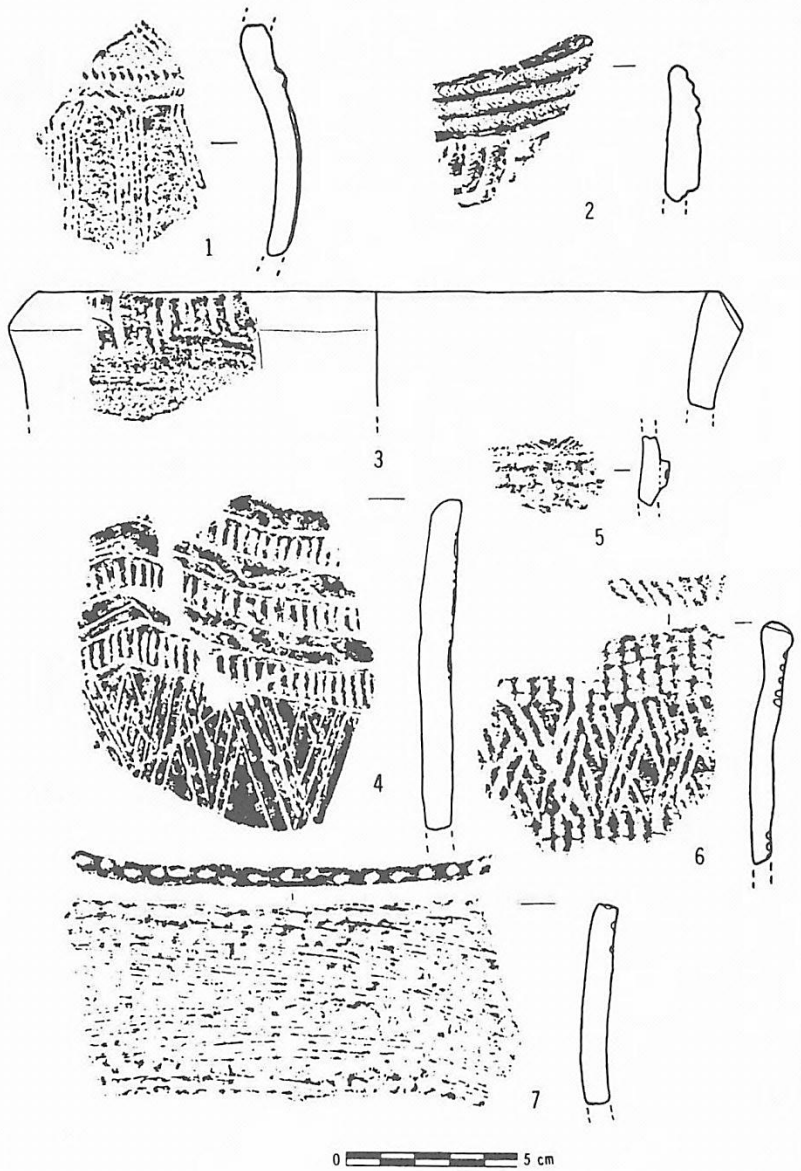
この土器は喜界島赤連遺跡の土器に類似しており、同一系統のものと考えられる。赤連系土器（室川下層式土器）に後続するものであろう。（図4―3）

**③ 面縄前庭式土器**　Bトレンチ六、七層、Cトレンチ九、十、十一層から出土し、縄文後期該当の土器グループの中では、最下層から出土し、これらの土器の中では最も古い型式と考えられるものである。胴部の張った尖底または丸底の土器で、口縁部に細形の刻み目凸帯を二条めぐらし、凸帯の間および凸帯以下の胴部に、鋸歯状の沈刻線を施す土器である。二条の凸帯のあいだを縦位の凸帯で結ぶもの、あるいは上部凸帯を波状にめぐらすものなどもある。土器面は研磨され、器壁は薄いのが特徴である。本遺跡の土器は文様がやや複雑で、本型式の多様性を示しており、おそらく型式分類の必要が生ずるであろう。

時期については、本遺跡の層序から見て、面縄東洞式より先行するものと思われるが、面縄第三・第四貝塚においては、面縄東洞式土器と共伴し、最後に下層で単純に面縄前庭式土器のみが残存するという状況から見て、



図5．神野土器　1―面縄庭式　2―面縄東洞式
3―松山式　4―嘉徳Ⅰ式　5―面縄西洞式
6―伊波式　7―伊波式祖形（高宮論文より）



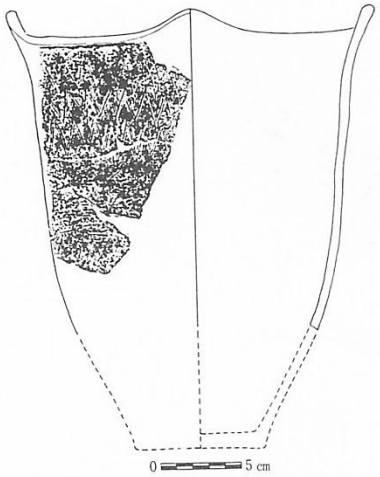



図７．神野土器・嘉徳Ⅱ式
（高宮論文より）

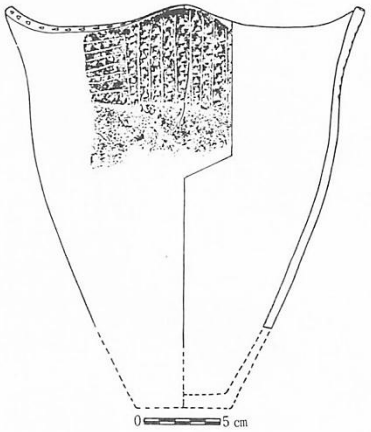



図６．神野土器・嘉徳ⅠＡ式
（高宮論文より）

飛び離れて古いものとは考えられない。（図５―１）

④ **面縄東洞式土器**　面縄東洞式土器は、各トレンチから出土している。層序から見て面縄前庭式に後続するものである。器形は平底深鉢形の土器で、口縁は平坦であるが、市来式土器の影響を受けて波状口縁となったものも見られる。口縁部に編籠をモチーフにした押引文を施している。（図５―２）

⑤　嘉徳Ⅰ・Ⅱ式土器　嘉徳Ⅰ・Ⅱ式は、三型式に別れるが、Ｃトレンチでは八層、六層から一括して出土している。いずれも深鉢形平底の土器で、波状口縁が見られる。嘉徳Ⅰａ式は、押引文に沈線の加わるもので、嘉徳Ⅰｂ式は連続爪形文に沈線文の加わるものである。嘉徳Ⅱ式は、文様が沈線文だけで構成されている。これらの三型式は、本来、分離するはずであるが、砂丘遺跡であるために、上下移行があって、一括して出土したものであろう。（図５―４）

⑥ **伊波式土器**　伊波式土器は、Ａトレンチでは、第五層から上部に集中して出土し、Ｃトレンチでは、第六層から主として出土し、嘉徳Ⅰ・Ⅱ式と共伴出土している。器形は胴部の張った平底深鉢形で波状口縁土器であ



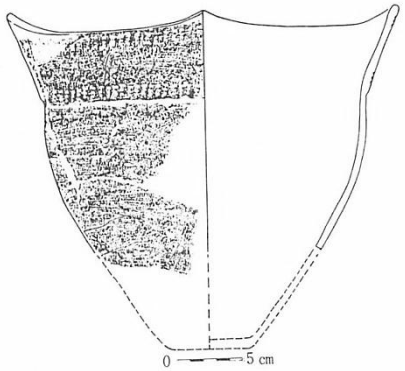



図８．神野土器・伊波式祖形
（高宮論文より）

る。文様は、又状の施文具をよく用い、口縁上端と胴上部に点文、短沈線文、長沈線文を連続してめぐらすものである。上下両文様帯に、綾杉文や斜沈線文を施すものもある。この部分に編籠状の文様を施すものが見られるのは、奄美の土器文化の影響であろうか。

伊波式は沖縄の土器型式であるが、本遺跡は一括出土の北限である。奄美の嘉徳Ⅰ・Ⅱ式と平行する時期であることが判明したが、嘉徳式のどの時期に当たるかを、明確にするのは、今後の究明すべき研究課題であろう。

以上にあげた土器類の他に、本土から移入されたと思われる土器に轟式土器、松山式土器などがある。特に、松山式土器の出土は、上部層の一括土器が、縄文後期に該当することを知る根拠となった。（図５―６・７）

**(2) 石器**　石器の出土は骨角牙器とともに、その量は少ない。石斧・磨石・石皿など数点が出土しているほか、一、二孔を穿った石製垂飾などが出土しているにすぎない。

**(3) 骨角牙製品**　骨角牙製品も、出土量が少なく、骨針などの実用品はまれで、ほとんど装飾品である。

**(4) 貝製品**　貝器は比較的に多く、ヤコウガイのふたで作った斧、貝匙、スイジガイの管状棘を研磨したもの、有孔鏃などのほか、ゴホウラ・メンガイ・オオツタノハ・サラサバテイなどを素材にした貝輪、イモガイの螺塔部を研磨したもの、ヤコウガイ・クロチョウガイの体層部を切り放して穿孔したもの、ガンセキボラを両面から研磨したもの、ゴホウラの外唇部に加工穿孔したもの、オオツタノハに穿孔したものなどがある。

## (三)　スセン当遺跡

スセン当遺跡は、知名町大字屋子母小字スセン当にあ

り、沖永良部島の南西部海岸砂丘に立地している。昭和五十七年三月、上村俊雄が発見し、同八月四日～十二日まで、鹿児島大学が発掘調査を行った。サイクリング道路に沿って、その東側に二×十四メートルのAトレンチを設けて調査を行った。

兼久式系統の単純遺跡で、若干の土器、石器、貝製品などを出土した。

## (四) 屋子母遺跡

屋子母遺跡は、沖永良部島の西南海岸にあたる知名町屋子母植村上坂（うんかみ）にあり、部落中央部の小高い丘陵上にある大平武雄氏宅地である。土器片と石器が出土している。土器は無文の小片で型式は明らかでない。石器は石斧、槌石などがあり、すべて砂岩質である。石斧は欠損していて完全ではないが、断面楕円形で蛤刃（はまぐりば）のものである。片側に敲打（こうだ）を加えてややくぼませた部分のあるもの一個、断面は楕円形を示すが、うすくひらたい石斧で両側に打ちかきおよび敲打による凹部を作ったもの一個。また刃部、胴部の幅が同じくらいの石斧の、頭部が欠損しているものが一個ある。断面が楕円形で厚く、刃部と胴部の幅の変わらぬもの二個、他に定角式のものの破片一個がある。

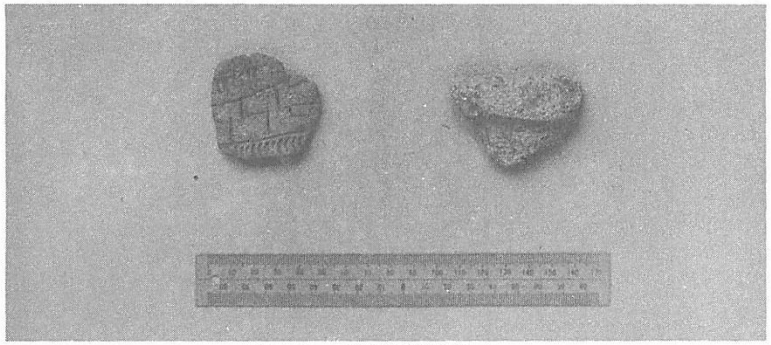
槌石は円礫を使用したもの一個、定角式の石斧の両端を敲打用として使用したもの一個、小型の円柱状のもの一個、大形で片側に凸帯を有するもの二個が出土している。概して石器の出土量が多い。（河口三十二年調査）

## (五) 小積原遺跡

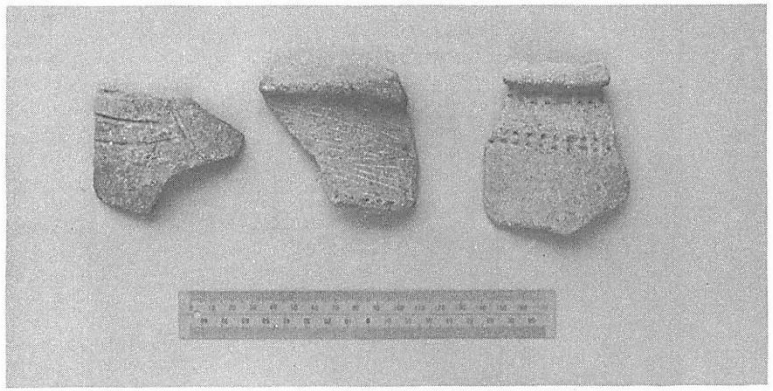
小積原遺跡は、和泊町役場に近い新納定明氏宅地を中心に、その隣接地におよぶ相当広い遺跡地である。今までに多くの石器の出土があって、一部は残存している。現在も地表に土器などの散布が見られ、隣接地の井戸を掘削した際は多量の貝と石器が出たことを報じている点からみて、遺跡の一部は貝塚となっているものと思われる。

地表散布の土器片は無文の宇宿上層式土器である。石器には石斧、槌石などがあって、石斧は定角式の磨製石斧の他に自然礫面を残し、一面を打ち欠いて刃をつけたものが多い。槌石は普通のもののほかに、大形で長径二十四センチないし二十センチ、短径十五センチないし十





12—1　小積原遺跡出土

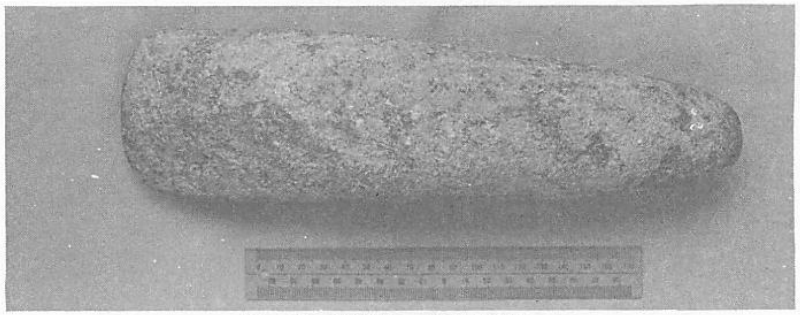


12—2　小積原遺跡出土

12—3　小積原遺跡出土

13―1　畦布ナーバンタ出土

13―2　畦布ナーバンタ出土



13―3　後蘭ターシキ又出土



三センチの楕円形の礫で長軸の両端に敲打のあとを残すものである。これに二種類あって、礫の両側に凸帯のあるものと、片側のみに凸帯のあるものとがある。砂岩質で重量はかなり重く、粉砕力は相当大きいものと思われる。同様の形状の槌石が屋子母の遺跡にも出土している。

以上は昭和三十二年の調査結果であるが、五十七年に再度現地を訪れたところ、家屋の模様などは変わったものの、遺跡地にはさしたる変化はないようである。有望な遺跡の一つであろう。

## (六)　畦布遺跡

畦布遺跡は、沖永良部島の北海岸に面する畦布の部落の北端にあたり、海岸泉地直上の崖端部のワンジョ、ナーバンタに位置している。島盛文氏畑地およびその付近の道路・畑地などに、遺物が広く散布している。

遺物は宇宿上層式土器片、弥生式甕形土器片、須恵器片などの出土が見られる。弥生式土器片は甕形土器底部三個と口縁部破片で、底部には木ノ葉の圧痕があるものもあった。この底部は甕の器台部に当たり、山ノ口式土器に類似して充実した器台部を有している。石器としては打製石斧断片と磨製石斧の断片があった。

以上は昭和三十二年の調査によるところである。昭和五十七年八月十日、現地を訪ねたところ、地主の島氏は畑地の整備中で、大型機械を用いて掘削し、遺跡地は完全に破壊されていた。島氏は作業中に出土した石斧を採集していたので、これを調査した。石器は石斧九個、環状石斧一個、槌石一個であった。石質は砂岩、変成岩、安山岩などが用いられており、環状石斧は径十・五センチ、厚さ三センチあり、中央の穴は両側から穿孔し、穴の径は二センチである。打製で頁岩（けつがん）製である。また槌石は、長径十八センチ、短径十四センチ、厚さ十一・五センチあり、花崗岩製である。

## (七) 中甫洞穴

中甫洞穴は、知名町東北部の久志検水窪にあり、和泊町との境界線に接している。大山山頂より東北東三・五六キロ、北部海岸線より二・二キロの内陸部にあり、標高百メートル、大山を囲んで分布するドリーネのうちの一つで、径七十メートルほどの窪地(くぼち)となっている。

遺跡地は地下に水脈があって、北より南方向に流れ、鍾乳洞を形成している。窪地内には所々に珊瑚礁が露呈し、南東側と北西側の二カ所に、地下の鍾乳洞へ通ずる洞穴が開口している。南東側の洞穴は小規模であるが、北西側の洞穴は規模が大きく、いわゆる「中甫洞穴」と呼ばれるもので、南東方向に向かって大きく開口し、入口幅十四メートル、奥行き二十メートル、天井の高さ五メートルである。

中甫洞穴遺跡は、昭和四十七年ごろ、和泊町後蘭の岸田善光氏が発見した。その後昭和五十七年八月、和泊町郷土史執筆のための資料採集に、後蘭を訪れた際に、善光氏の尊父岸田和夫氏から、中甫洞穴の紹介をうけ、遺跡について知ることができた。

同年十月には、河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望が、発掘調査を行った。続いて昭和五十八年・五十九年には、知名町の主催で同じく河口らが発掘調査を行ったのである。

### 1 遺跡の状態

第一次の調査では、中甫洞穴入口の西側絶壁に沿って、二×七・六メートルの第一トレンチを設けて、発掘調査を行った。

第二次調査では、洞穴入口の西側、中央、東側および下部洞穴入口堆積部において、それぞれ第二から第五の、四本のトレンチを設け、第二トレンチは洞穴入口西壁より東へ向かって二×四メートルの区画、第三トレンチは洞穴入口中央部に南北方向に二×八・四二五メートルおよび東側に接して二×四メートルの区画、第四トレンチは洞穴東壁に接して二×十メートルの区画、第五トレンチは下部洞穴入口堆積部に南北方向に二×五メートルの区画を設定して発掘調査を行った。

第三次調査では、洞穴内部、洞穴前の窪地、南洞穴および同南入口、洞穴上部台地に、第六から第十五まで十本のトレンチを設け、第六トレンチは窪地入口から中央



図9　中甫遺跡周辺地形図

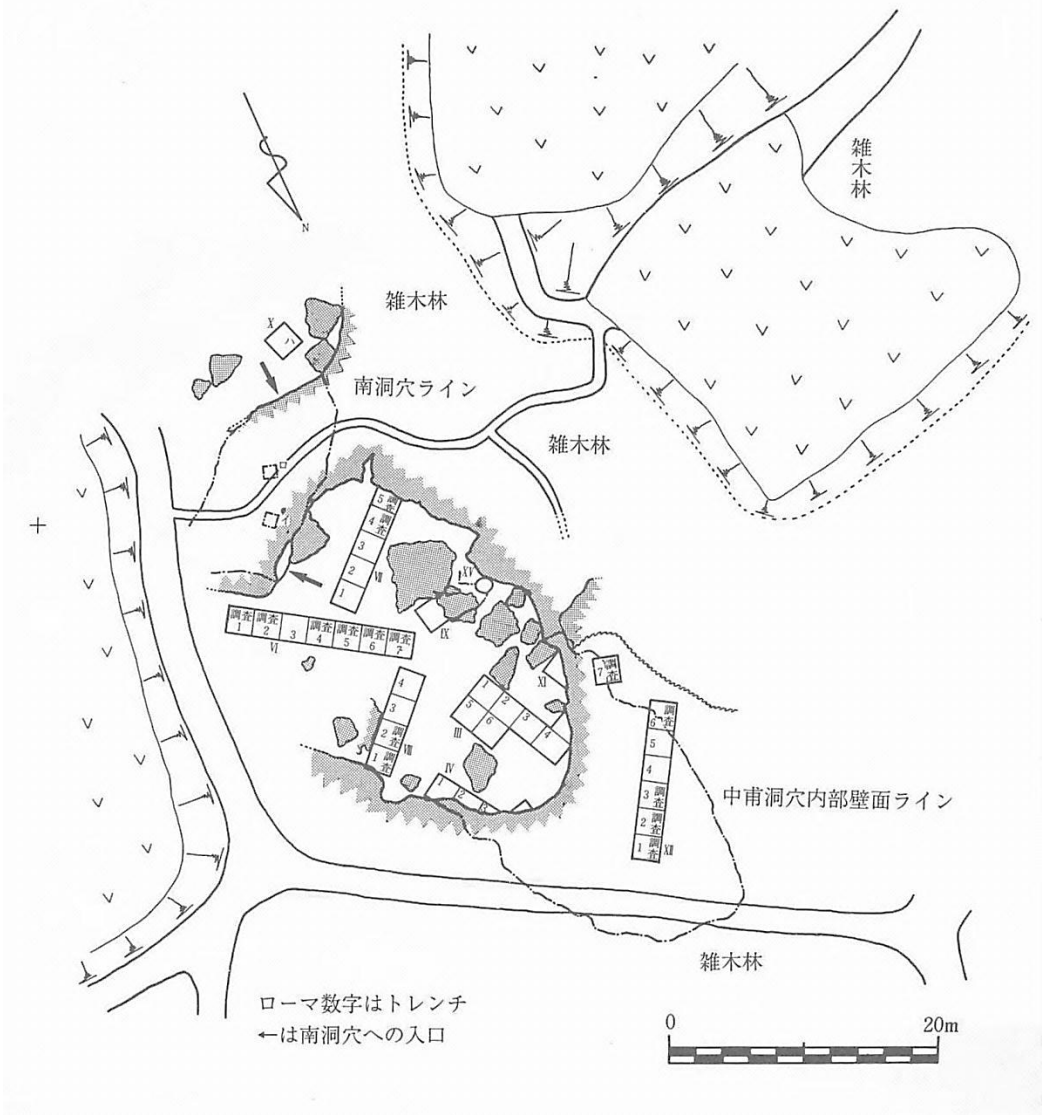


図10　第1トレンチ東壁断面図



へ向けて二×十四メートルの区画、第七トレンチは窪地南隅に二×十メートルの区画、第八トレンチは窪地東辺に二×八メートルの区画、第九トレンチは窪地西辺の小洞穴に二×二メートルの区画、第十トレンチは南洞穴内に一メートル四方の区画二カ所と南洞穴南入口付近に二×二メートルの区画、第十一トレンチは洞穴入口西壁に沿って三×三・五メートルの区画、第十二トレンチは洞穴上の台地に二×十二メートルの区画と二×二メートルの区画、第十三トレンチは洞穴入口東側壁に沿って二×二メートルの区画、第十四トレンチは洞穴の内部岩盤の上に四×六メートルおよび両側の壁に沿って不定形の区画、第十五トレンチは窪地西壁に沿って珊瑚礁に囲まれた不定形の区画を設定して発掘調査を行った。土が粘質であることと、珊瑚礁の巨岩が土中に埋存しているために発掘は極めて困難であった。

層序は第一次調査の第一トレンチの層序を標準としてあげよう。堆積土は五層に分けられる。

**第一層**　黒色土層で厚さ十センチ、下部は黒褐色に移行する。有機質を多く含み、乾燥して粒状を呈し、石灰岩屑（せつ）を含む、遺物包含層である。

**第二層**　茶褐色で厚さ二十センチ、上層部は黒褐色で、下部に下るにしたがって茶褐色に漸移する。遺物包含層。

**第三層**　暗褐色で厚さ十五センチ、上部は褐色を呈し、下方へ暗褐色に漸移する。粘質が強く石灰岩を含む。遺物包含層である。

**第四層**　厚さ百六十センチあって三層に分かれる。

**第四上層**　褐色で粘質が強く、石灰岩屑を多く含む。遺物包含層である。

**第四中層**　黒褐色で粘質が強く、石灰岩屑を含む。遺物包含層である。

**第四下層**　茶色土層で粘質が強く、石灰岩屑を多く含む。遺物包含層である。

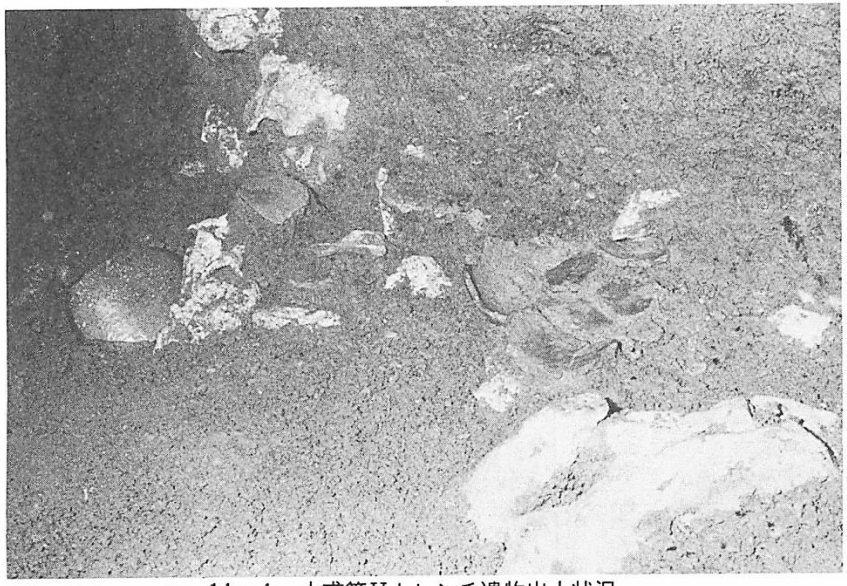
**第五層**　灰褐色土層で粘質がやや強く、石灰岩屑をほとんど含まず、一方他の層に見られない雲母を含み、粒子もきわめて細かである。水平に堆積していて、他の層と異なっている。無遺物層。

**遺　構**　中甫洞穴遺跡の三次にわたる調査は、洞穴の内部、前面の窪地、南洞穴、洞穴上の台地など、調査した地点は十五カ所に及び、中甫洞穴およびその周辺の発掘はほぼ落ちなく行われた。

14—1．中甫洞穴全景

14—2．中甫第Ⅲトレンチ調査風景

14—3．中甫第Ⅳトレンチ土壙墓



14—4．中甫第Ⅴトレンチ遺物出土状況

調査の結果、遺跡と思われる所は、中甫洞穴と南洞穴および両者の中間にある巨岩の下に発見された小洞穴の三カ所であった。

南洞穴では、内部に設けた二カ所の試掘溝から少量の土器片と獣骨が発見されて、先史時代に利用された跡が認められた。

南・北洞穴の中間に発見された小洞穴では、若干の土器・石器・獣骨が出土したが、二次堆積の疑いもある。

しかし上部に遺物遺構が検出されていないところから、遺跡の一種と見られよう。

中甫洞穴は中心的な位置にある遺跡である。洞穴内部では、南へ傾斜した床面中央部から東壁までは、古い型式の遺物が出土しているのに対して、西壁下からは新しい型式の遺物が出土している。一方、洞穴西側の地下水路に通ずる空洞内の堆積土からは、古い遺物が相当量出土するが、この土は、洞穴入口の西壁下から流れ込んだ二次堆積である。

洞穴入口の西壁下は、最も遺物の堆積状況の良好なところで上下に分かれて、最古の遺物から最新の遺物まで、層位的に出土し、本遺跡の基準となる出土状況を示している。ここが、この遺跡で最初に人が住んだ所であり、また最後まで人が住んだ所でもある。この地点の入口付近では、最後の時期の埋葬も行われている。

洞穴入口東壁下で、最も注意されるのは、土壙墓の発見である。土壙は第四層を掘り込んで作られており、石灰岩屑を含む、あまり粘質の強くない暗褐色土を埋土としている。土壙の形は隅丸の三角形状で、このなかに頭を南東方向に向けた、東向きの横臥屈葬の遺体が埋葬されていた。頭骨と尾骨に接して、石灰岩礫を頭骨の上方に三個、尾骨の下方に二個を配置してあった。このうち尾骨下方の一個は基部を四層内に持っていた。他の四個はいずれも基部が土壙内にあるが、共に埋葬にあたって、意図的に礫を配置したものと思われる。また土壙上にも石灰岩礫が数個発見されている。副葬品はないが、直上の石器・土器の出土状態から見て、縄文時代該当の時期に属するものと思われる。

この遺跡は、遺物の出土状態から見て、遺跡が成立した当初は、洞穴の中央部から車壁までと、入口西壁下および車壁下が生活面として使用され、この時期の終末期に、東壁下の入口付近に埋葬が行われたと見られる。こ



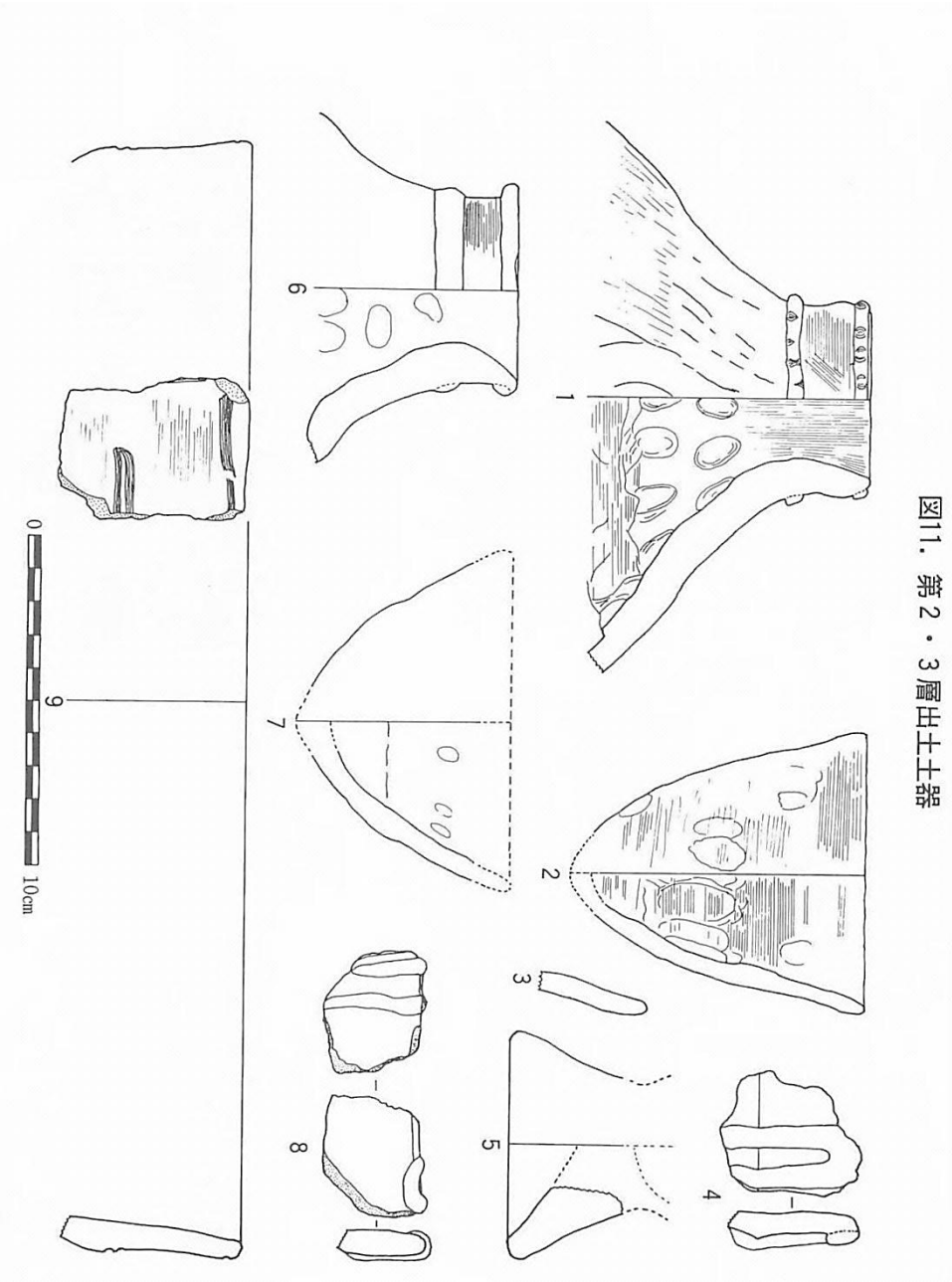
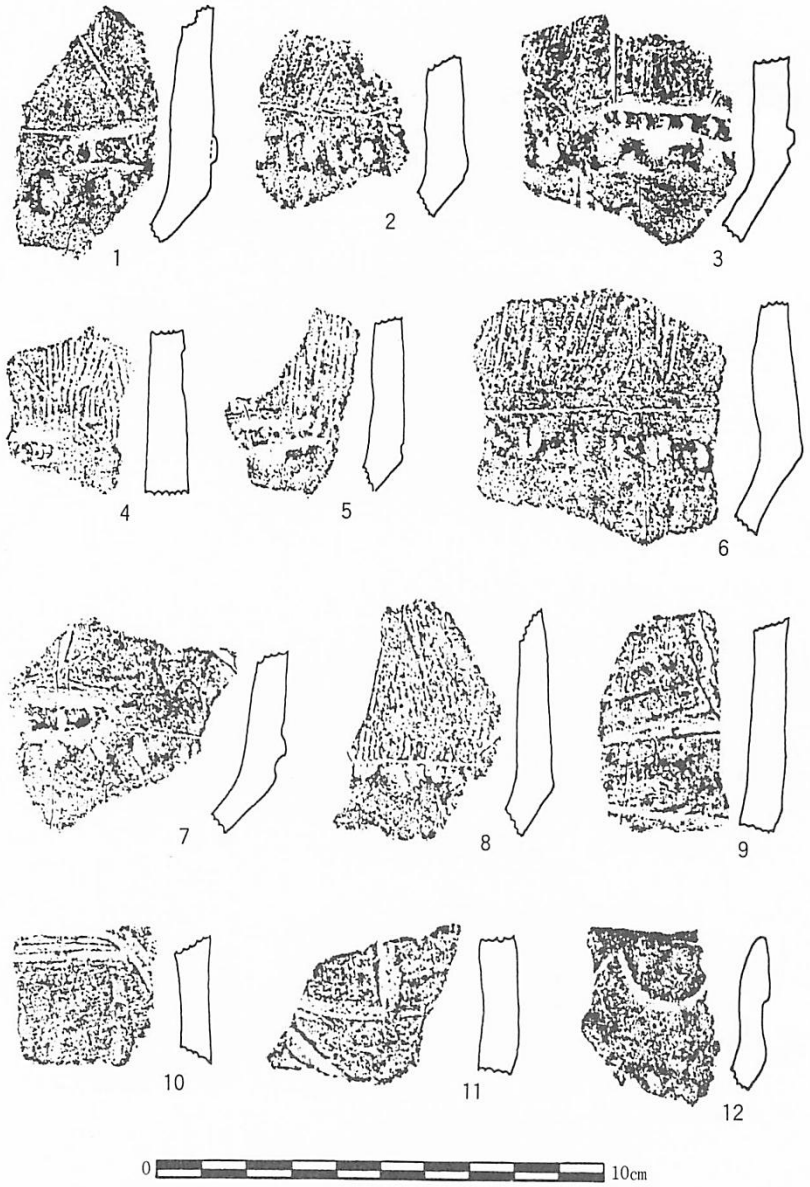
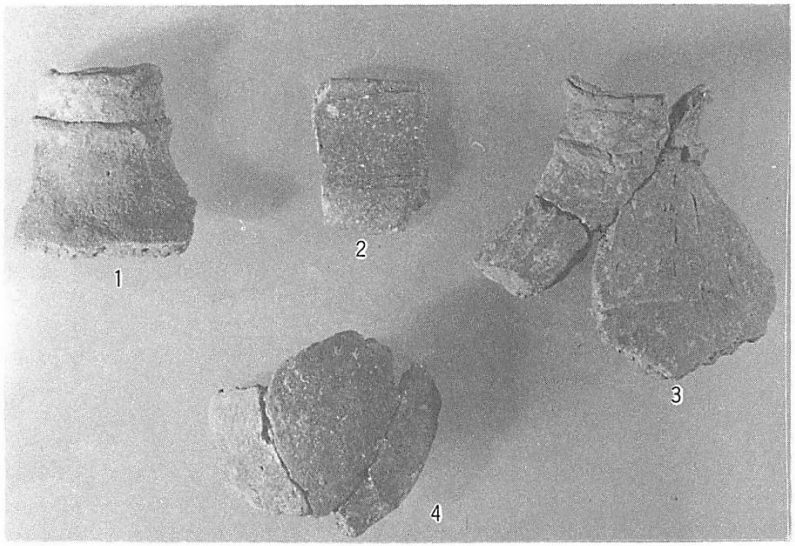



図11. 第2・3層出土土器

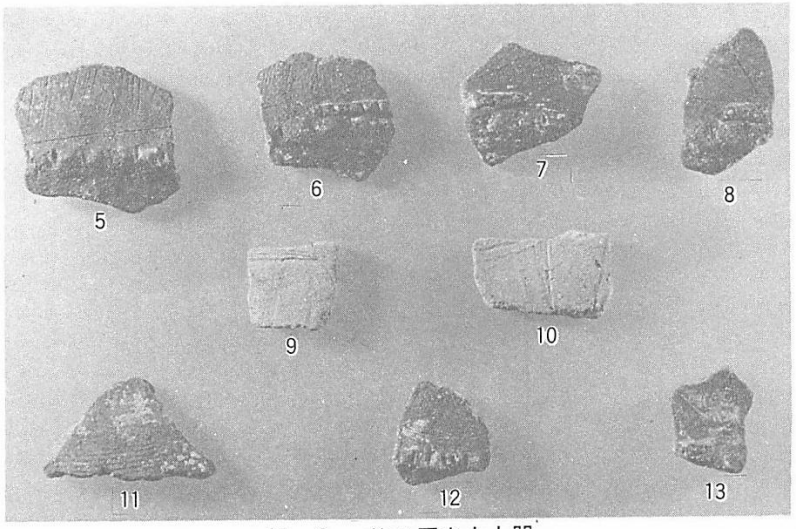
図12.　第２層出土土器



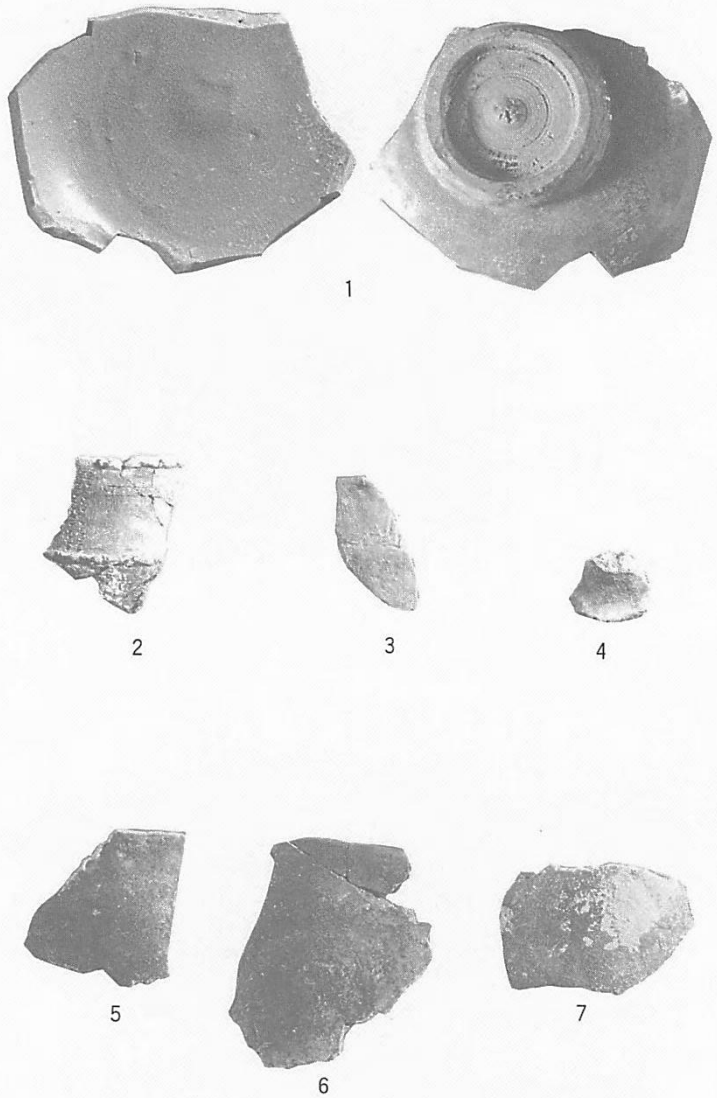



15―1　第２・３層出土土器




15―2　第２層出土土器




15―3　中甫出土土器

1：(XIV－4－表層)，2：(XIV－1－1)，3：(XIV－11－上層)，4：(XIV－8－下)
5～7：(XIV－6－大岩に付着)



の後、相当の空白期間を経て、洞穴入口西壁下から洞穴内西壁下にかけて、再び生活が営まれ、入口付近で埋葬も行われている。

## 2　遺　物

### (1) 土器

中甫洞穴では、最近、南島においてようやく知られるようになった、爪形文土器のほか、南九州から移入されたと思われる、轟Ⅰ式土器を中に挟んで、貝殻を施文具とした、連点波状文、連点文など、数種の新しい型式の土器が発見され、また、弥生後期土器と共に兼久式土器を出土した。最も新しいものでは、青瓷も、一片であるが出土している。

第一トレンチの層序でいうと、第二、三層（上層）からは兼久式などのあたらしい土器が出土し、第四層からは古い土器群が出土している。第四層（下層）はさらに上・中・下三層に分かれて、層位的に出土しそれぞれ新旧の別が認められる。

① **青瓷**　第十四トレンチ四区にある巨大な石灰岩落盤の下にできた空隙（くうげき）から、青瓷の椀が出土した。胎土は灰色を呈し、削出し高台である。灰味のある透明感の強い釉（うわぐすり）が薄くかかり、体部の回転ヘラ削痕が見える。釉は高台外面までかかり、一部畳付にまわっている。無文で貫入が見られる。

② **上層の土器**　第一次調査の第二、三層土器および、それに該当する層から出土した土器である。

**兼久式土器**　壺形土器と甕形土器とのセットをなしている。壺形土器は、高さ十五～二十センチの小形土器である。輪積で、継ぎ目の内側には指頭でおしつけたあとが明瞭に残っている。焼きは良く、色は明るい褐色である。形は胴部が球形に張り、肩から急にせばまって、頸は筒状になって立ちあがり、口縁部には細い凸帯を二条めぐらし、刻み目を施している。底部は丸底である。器壁が厚く、器面はナデ仕上げを施している。胎土には石灰岩粒子および雲母が認められる。煮沸には使用していない。

甕形土器は、口縁部から胴部へ移行するところで、「く」字上に屈曲する器形である。口縁部に凸帯・沈線などを施し、この部分が肥厚するものもある。「く」字状屈曲部に刻み目を施し、その直上に横位の刻み目凸帯を部分的に貼り付け、さらに細い沈線で口縁部に直線文を描くものもある。この土器は粒子が荒く、胎土に石灰

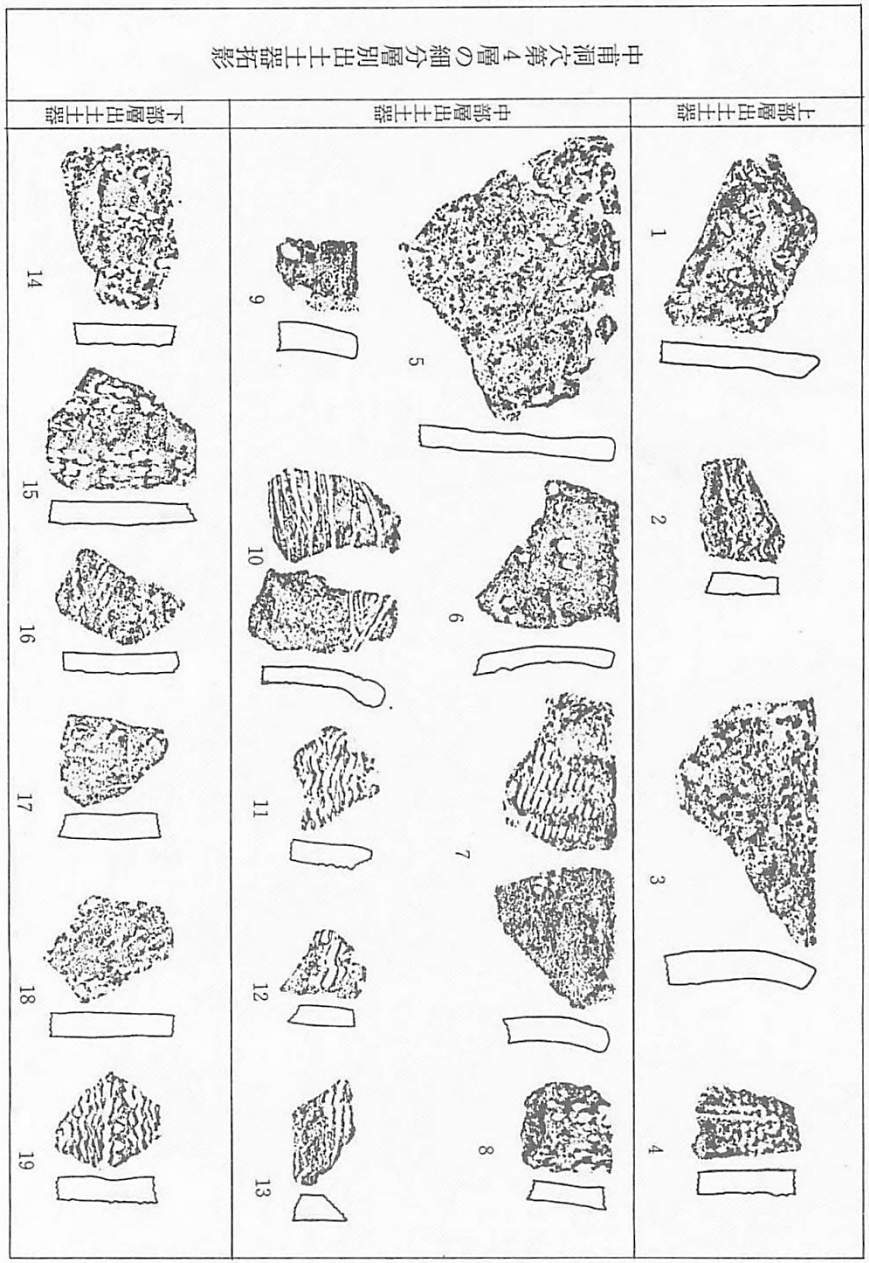
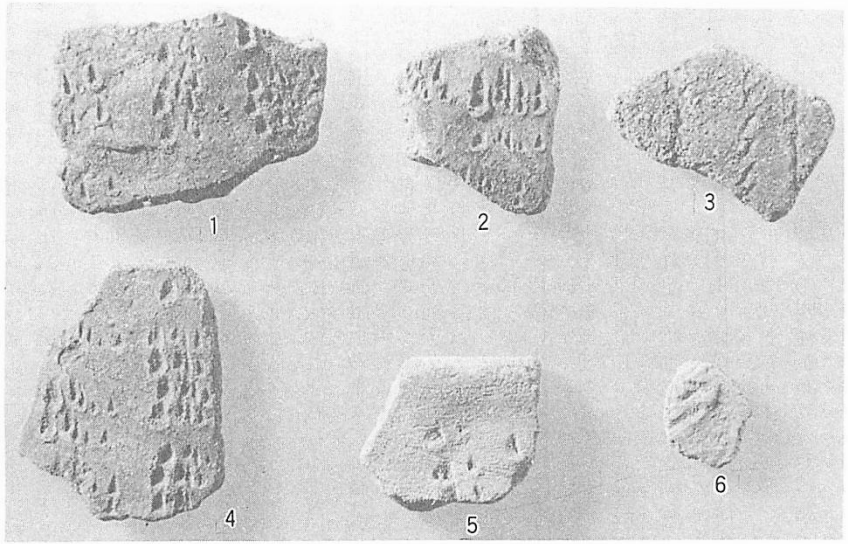
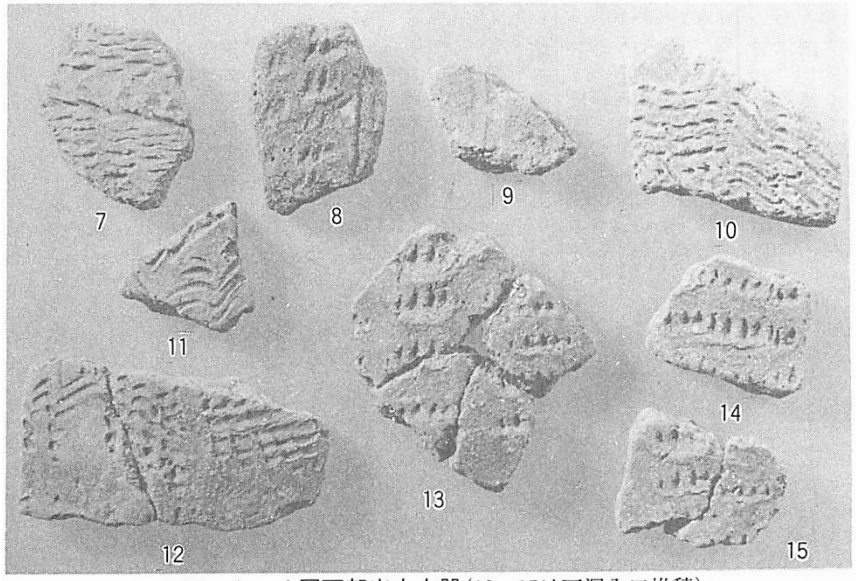



図13．第4層土器の層別分類表






16—2．4層下部出土土器




16—1．4層下部出土土器(10～15は下洞入口堆積)

岩粒子・雲母を含み、八ケ目仕上げで焼成は良くない。煮沸に使用した痕跡がある。甕形土器の底部は平底で、底面に木葉圧痕があって兼久式の特徴を現している。

**上げ底の底部**　この層からは、南九州から移入されたと思われる上げ底の底部が出土している。松木薗遺跡出土の弥生後期甕形土器の底部に類するものである。このほか、地元で作られた鉢形土器で、弥生後期の影響を受けたもの、あるいは弥生後期と思われる土器片などが共伴出土していて、本遺跡出土の兼久式土器は、弥生後期に該当する可能性が強い。

### ③　下層の土器

**第四上層の土器**

縄文前期の轟Ⅰ式土器以後に当たる時期である。口縁部の外反するもの、波状口縁をなすもの、口縁部が内側へ傾斜し、したがって胴部の張るものなどの器形があり、概して深鉢型と考えられる。胎土は粒子が細かで、器面は平滑に仕上げられており、焼成は普通であるが、もろくて破損しやすいものもある。文様は連点文・浅い波状文・篦削連続文・凸帯文の四種があり、他に無文土器がある。

**波状文土器**　細い篦状工具で、浅い波状文を断続して、あるいは継続して施文したものである。

**貝殻腹縁刺突文土器**　貝殻腹縁を工具として、条痕を施し、同工具で連続刺突して、斜行する連点状の文様を描きだすもので、文様の縁には、工具の刺突による粘土の盛り上がりが見られる。胎土に細砂を含み、その中に石灰岩の粒子も見られる。焼成は良好で、色調は紅褐色である。

**凸帯文土器**　低い粘土帯を貼付した土器である。小片で全体の様相は不明である。

**第四中層の土器**

**轟Ⅰ式土器**　南九州からの移入土器と考えられる。第一トレンチ二、三区の第四中層から出土した。一個体分の土器である。高さは三十四・八センチ、やや乳房状に近い尖底土器で、外側へ開きぎみの直口深鉢型の器形である。器壁は厚く、一センチ内外あり、底部は四センチに達する。輪積で成形され、アナダラ属の貝殻腹縁を用いて器面を調整し、内面は太めの肋を有する貝殻を使用して、主として横位に調整し、その間にわずかに斜位をまじえ、外面はやや細めの肋を有する貝殻を使用して、

17. 中甫轟Ⅰ式土器
（2区4層中部出土）

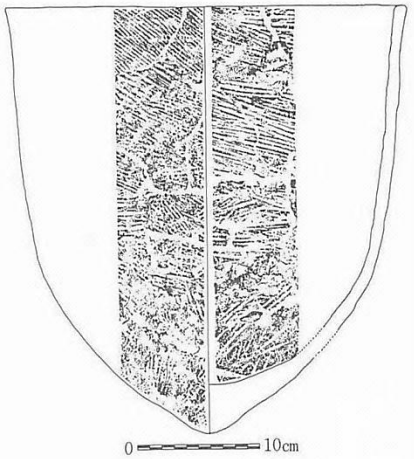



図14. 中甫轟Ⅰ式土器
（第4層中部出土）

斜位調整を主として、わずかに縦位をまじえ、底部は中心より放射状に調整する。

胎土は砂粒を多く含み、石英・輝石・雲母・石灰岩粒が認められ、色調は、底部は黒褐色、下胴部は赭褐色、上半は黒褐色ないし紅褐色で、内面底部は黒褐色、胴部へ移行すると赭褐色となり、上部へ移行するにしたがって黝褐色に変わる。焼成は普通であるが、砂粒を多く含むために器壁面より粉状となって剝離する傾向がある。

轟式土器については、概説で述べたが、本遺跡出土の轟式土器は、轟式土器の内で最も古い轟Ⅰ式土器である。この土器が第四中層から出土したことで、中甫洞穴第四層出土の土器が、縄文時代前期以前に属することが明らかになった。

中甫第四層出土の土器群は、南島で今まで発見されたことのない土器型式で、時代判定の決め手を欠くものであったが、轟Ⅰ式の共伴出土によって、その時期が推定できるようになり、従来南島において空白であった、爪形文土器と赤連系土器（室屋下層）との間の空白を、中甫第四層出土の土器群が充塡することになり、南島の先史時代の古い時期に、貝殻を施文具とする一連の土器

文化が存在したことを、新たに発見したことになった。

南九州の縄文土器文化の最も古い時期に、貝殻を施文具とする文様を施した円筒形土器群の文化があるが、南島の貝殻文土器文化と対比して、おもしろく、両者の比較研究もこれからの研究課題であろう。

轟Ⅰ式土器と同一層序の土器について見ると、口縁部が外反するものが多く胴部の張るものもある。一般に小形で口径二十五センチ内外である。胎土は粒子が細かで、焼成は良く、色調は紅褐色を呈し、まれに黒褐色のものもある。文様には、連点文・櫛描文・沈線文・波状文の四種類があり、この層でも連点文が多い。

**連点文土器**　第四層上部の連点文に比べて、点が小さく、施文具は二叉に近い細めの篦状工具を用い、縦または斜めに施文している。

**櫛描文土器**　歯の数が四本の櫛状工具、あるいは貝殻腹縁を利用したかと思われる施文具を用い、横方向に連続して施文したもので、同じ様な工具で、土器の裏面にも局部に施文したものである。

**沈線文土器**　横位の細い沈線を、口縁に平行に施すものである。裏面にも幾何学文様を施し、前者とともに南島では極めて珍しい例で九州の前期縄文土器と対比されるものといえよう。

**波状文土器**　貝殻腹縁あるいは櫛状工具を施文具として、横位の波状文を施したものである。

**第四下層の土器**

第四下層の土器は、層位的に轟Ⅰ式土器以前の時期に属すとみられる。文様は、連点文・羽状連点文・篦削連続文・波状文の四種類がある。

**連点文土器**　第四中層の土器文様より規則的で、前者は施文具に篦を用いるが、本例は貝殻腹縁を使用するために、点文の数や間隔に規制が見られる。

**篦削連続文土器**　篦を施文具として、連続して爪形あるいはジグザグの文様を施文したものである。

**波状文土器**　第四中層の波状文と同類であるが、施文法が一層複雑になっている。貝殻腹縁を用いて、一方向に引き描くだけでなく、多様な操作を行って施文している。

**羽状連点文土器**　貝殻縁を施文具として、羽状の連点を施文したものである。

**連点波状文土器**　この土器は第五トレンチの堆積土



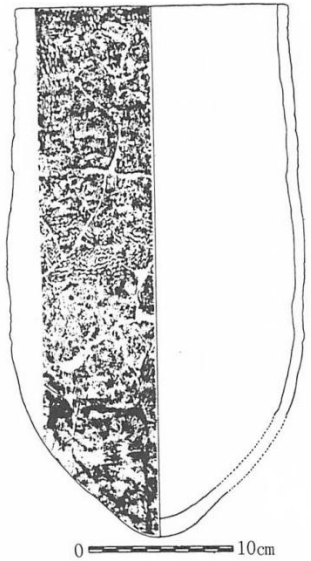
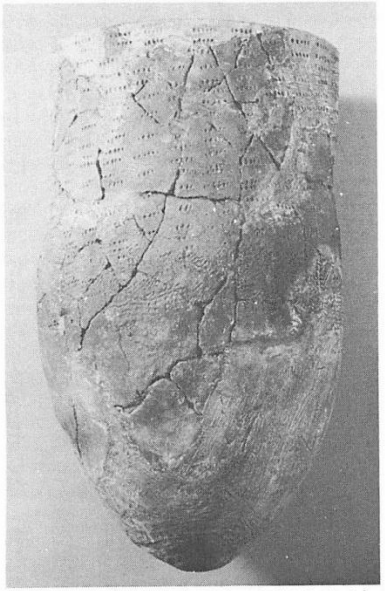



図15. 中甫連点波状文土器



18. 連点波状文土器（下部洞穴出土）

から出土したものであるが、第四下層出土の土器である。推定高三十七センチ、口径十九センチ、下胴部のやや張り出した、丸底に近い尖底で、直口であるが、外反するものも見られる。器高が著しく高く、南島の古い時期の一つの特徴を現すものといえよう。後半の土器に比べて、大形である。

成形に輪積の手法が用いられ、凹凸が著しい。胎土は粒子が細かで、少量の石灰岩粒を含んでいる。焼成は普通であるが、質は割にもろい。色調は赭褐色であるが、下胴部の張りだした部分に、炭素の付着による黒褐色化が見られ、底部も黝褐色を呈している。内面は褐色であるが、底部にはこげつきの跡が残っている。器面は平滑でナデ仕上げであるが、下胴部には粘土粒が付着し、これをなでつけて、表面がぶつぶつした状態となっている。

文様には特色がある。施文具は肋のある貝殻腹縁部で、土器口縁部から胴部中央のあたりまでは、横にならんだ四～六個を単位とする連点を、縦横に並べて施文し、胴部中央には同じ施文具で波状に横引きし、あるいは連点を加えるなどして、複雑な横走する文様を描出するものである。

## 第四層最下部の土器

爪形文土器は、第四層最下部から出土した。中甫の爪形文土器の特徴は、土器の表裏に相対応して、指頭による押圧痕を有することである。これは輪積みによって土器を制作する際に、粘土の輪を重ねて、これを接着するために指頭によって内外からつまみ、土器を左方向に回転しつつ成形する。この時に生じた成形痕である。この作業によって器面には指頭痕をつらねた溝状のくぼみが、横位にやや顕著に、縦位には浅く出現する。この押圧痕や隆起帯は、意図的なものではない。しばしばこれを文様として取り扱うのは誤りである。中甫洞穴出土の土器に施された爪形文は、押圧成形したのち、二次的に人の爪によって施文されている。器面調整にはナデ仕上げが行われているが、爪形文には、ナデによるかぶりが見られないから、器面調整を行ったのち、爪形を施文したものと見られ、土器の制作過程は、指頭押圧による成形→ナデ仕上げによる器面調整→爪形の施文、の順で行われたことがわかる。

中甫洞穴出土の土器に施された爪形文は、文様の幅は五～六ミリで小さく、隆起帯・押圧痕の差別なく施され、一次的に指頭の押圧によって、爪形が印されたものでないことを示している。厚さは三・五ミリ～四・五ミリ、平均四ミリである。胎土は粒子が細かで、石英・長石・雲母を含み、石灰岩粒子を含むものもある。いずれも焼成がよく堅く焼きしまっている。

以上、出土土器の大略について述べたが、他に、下層の土器には、円筒形丸底の無文土器、

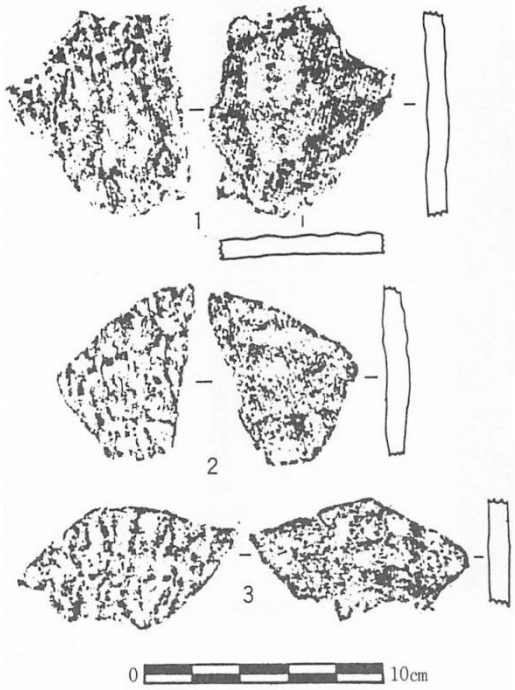
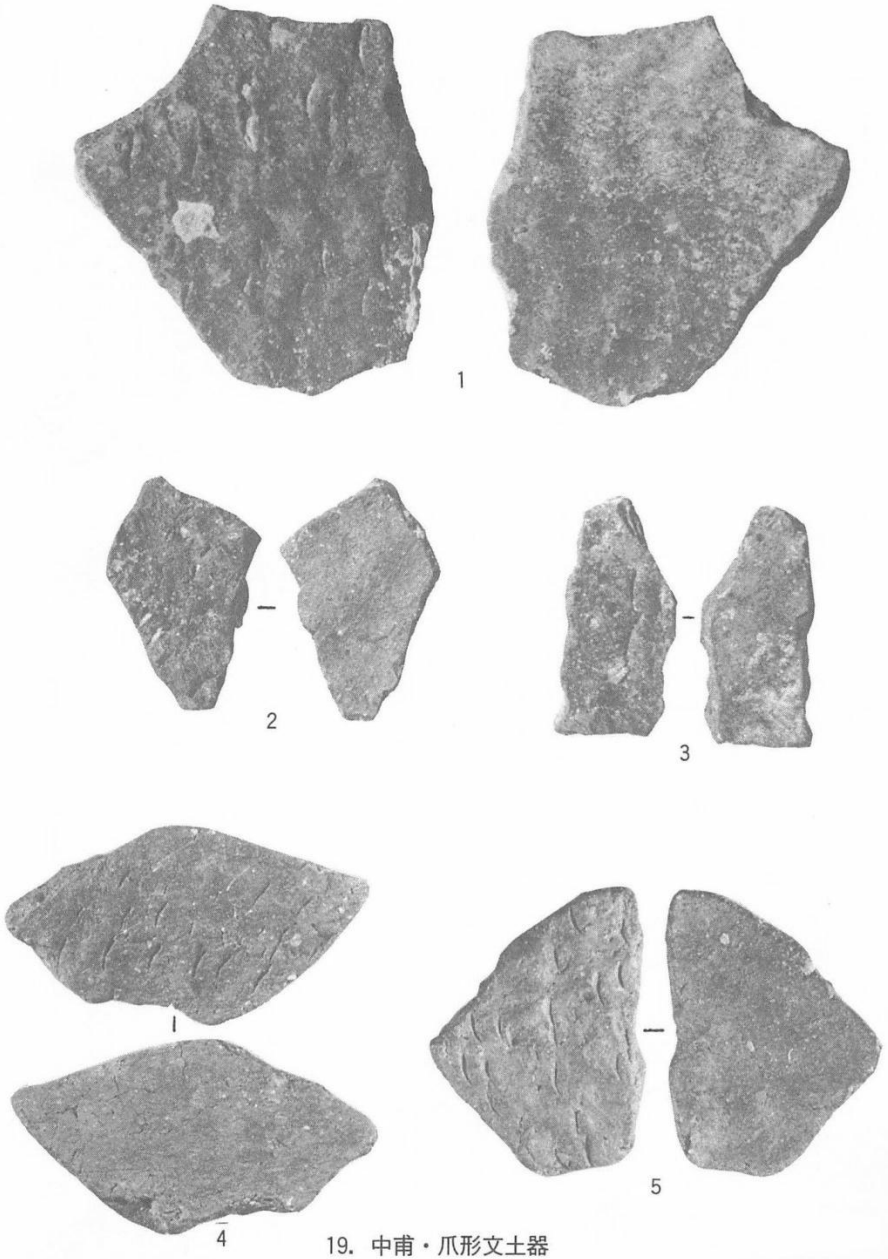



図16. 中甫・爪形文土器






19. 中甫・爪形文土器

同様な器形の土器で、縦または横のふとめの爪形文を施したものなどがあり、採集土器には弥生土器と思われるものもあり、須恵器の破片も見られる。この遺跡が縄文時代早前期該当の時期から、古墳時代該当の時期まで継続したことを示すものであろう。

**(2) 石器**　石器は、三次にわたる調査で比較的多く出土した。種類は打製石斧・磨製石斧・磨石・叩石・石皿・剝片石器などである。

**打製石斧**　第一トレンチ三区四中層から出土した物である。長さ十一・三センチ、幅四・二センチ、厚さ一・八センチ、片刃である。轟式土器に共伴出土した。砂岩製である。

**磨製石斧**　第十四トレンチ一区第四中層から出土したものである。長さ六・五センチ、幅二・八センチ、厚さ〇・七センチで小形である。砂岩製で、刃部は欠損している。

**局部磨製石斧**　本遺跡では最も多く見られる石斧である。第二次調査で六点、第三次調査で七点、計十三点出土している。両面および側面に打割面や敲打(こうだ)痕を残し、局部的に研磨したものである。大半は砂岩製である。

**磨石(すりいし)**　局部磨製石斧と共にその出土量は多く、第二、三次調査で計二十八点出土している。径十センチ内外のものを主体とし、石材は砂岩、花崗閃緑岩、石英班岩などからなる。

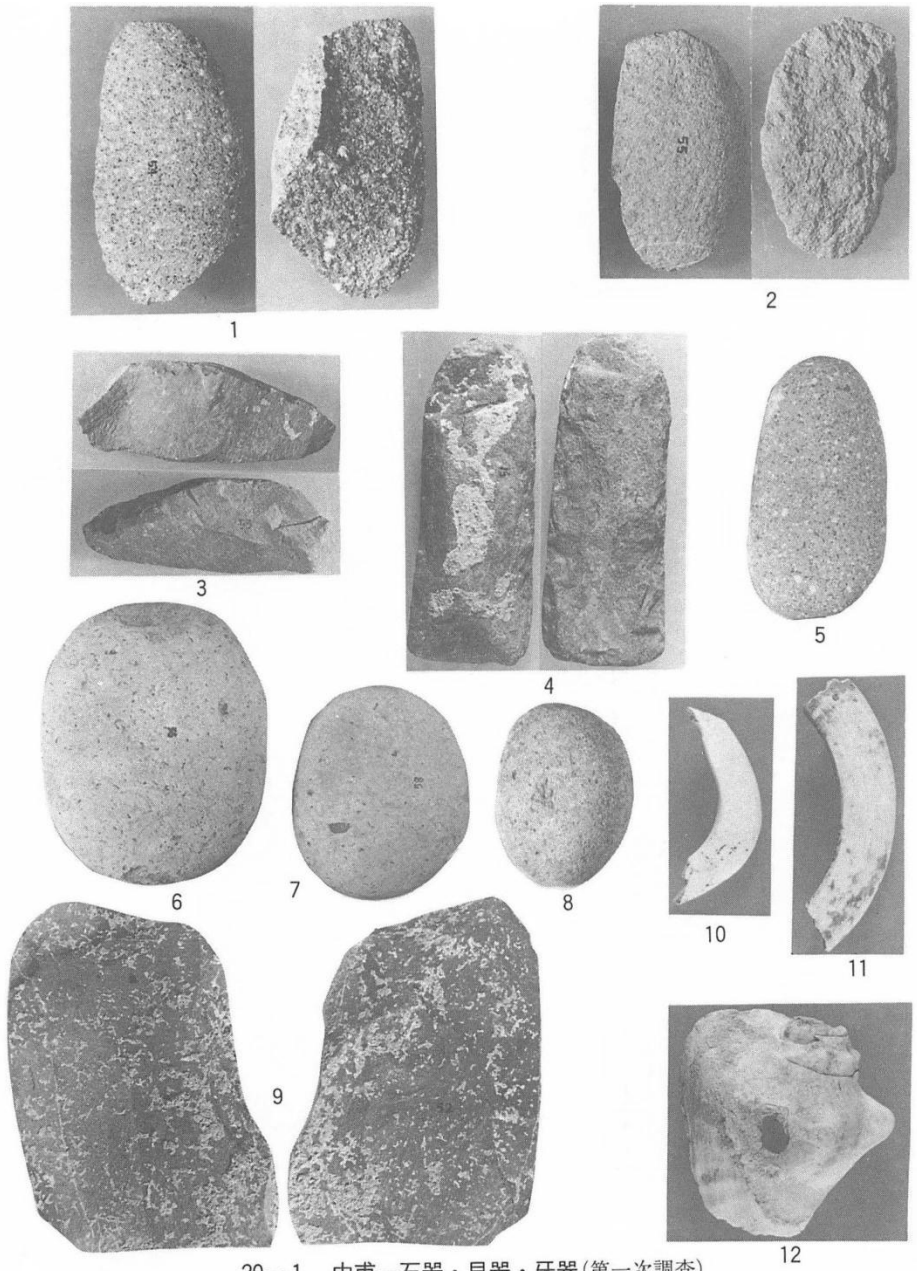
**叩石(たたきいし)**　第一トレンチおよび第五トレンチから出土している。石材は砂岩を主とし、花崗岩をまじえ、火熱を受けたものも認められる。石の大きさは磨石にほぼ一致し、側面に敲打打痕を残すものである。

**特殊石器**　第十四トレンチ一区で除去した石灰岩下底部に付着していたもので、おおよそ第四層最上部に該当するものと思われる。刃部を欠損するものの、略完形であり長さ二十六・五センチ、両面を丁寧に研磨するもので、わずかにのこる刃基部から見れば、刃部は片面から研ぎだして片刃としたものと考えられる。南島では初めての出土である。

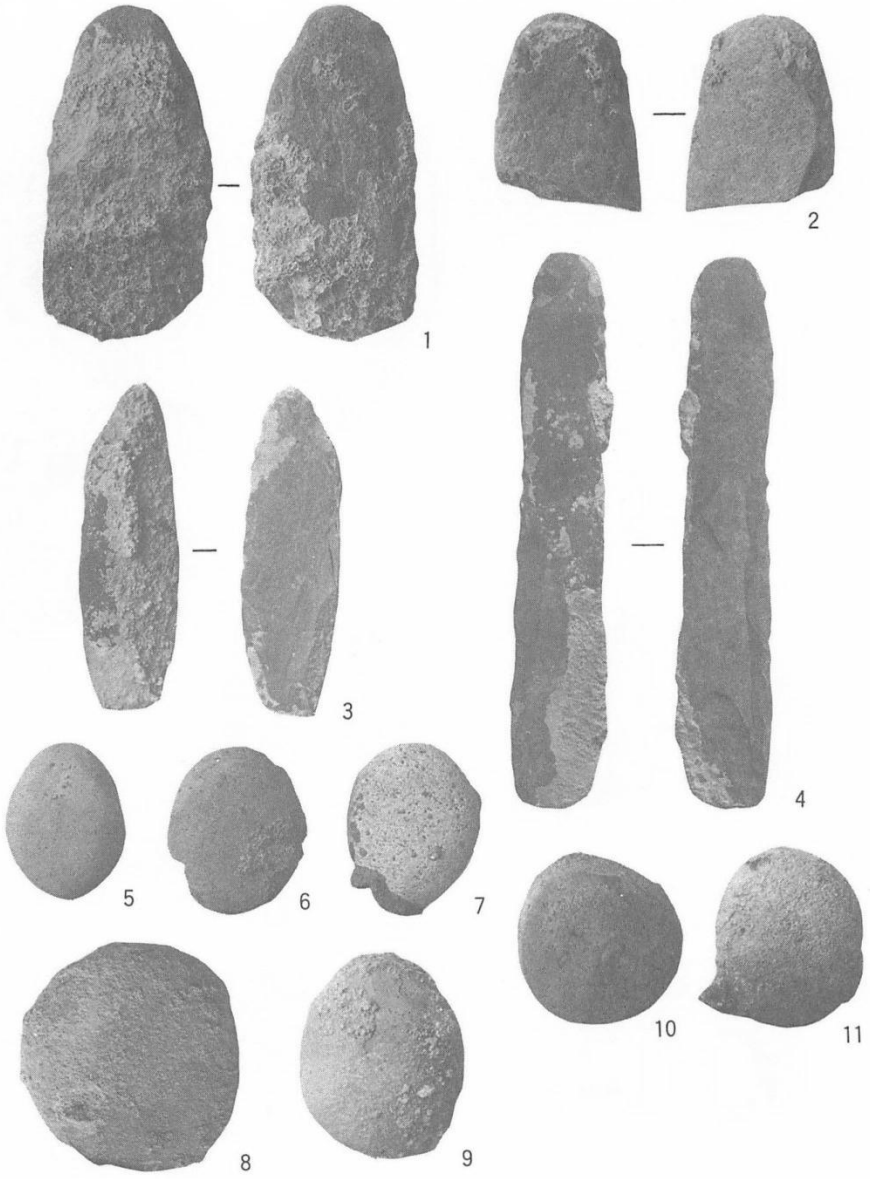
**その他の石器**　自然円礫を打ち欠いて一部を剝離調整し刃部を形成したもので、ほかにも小数例見出すことができる。砂岩または頁岩製である。

その他、石皿、砥石の小破片が第四、五トレンチから出土している。



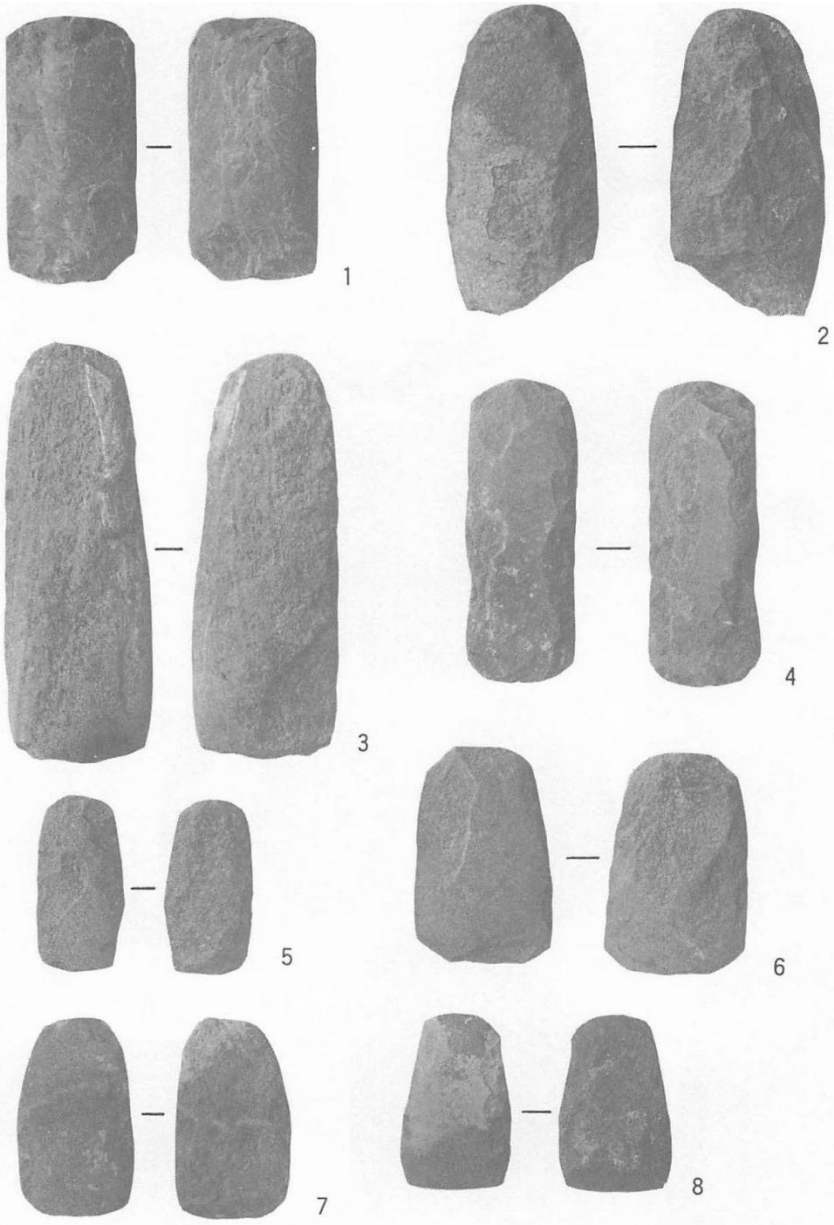



20－1．中甫―石器・貝器・牙器(第一次調査)

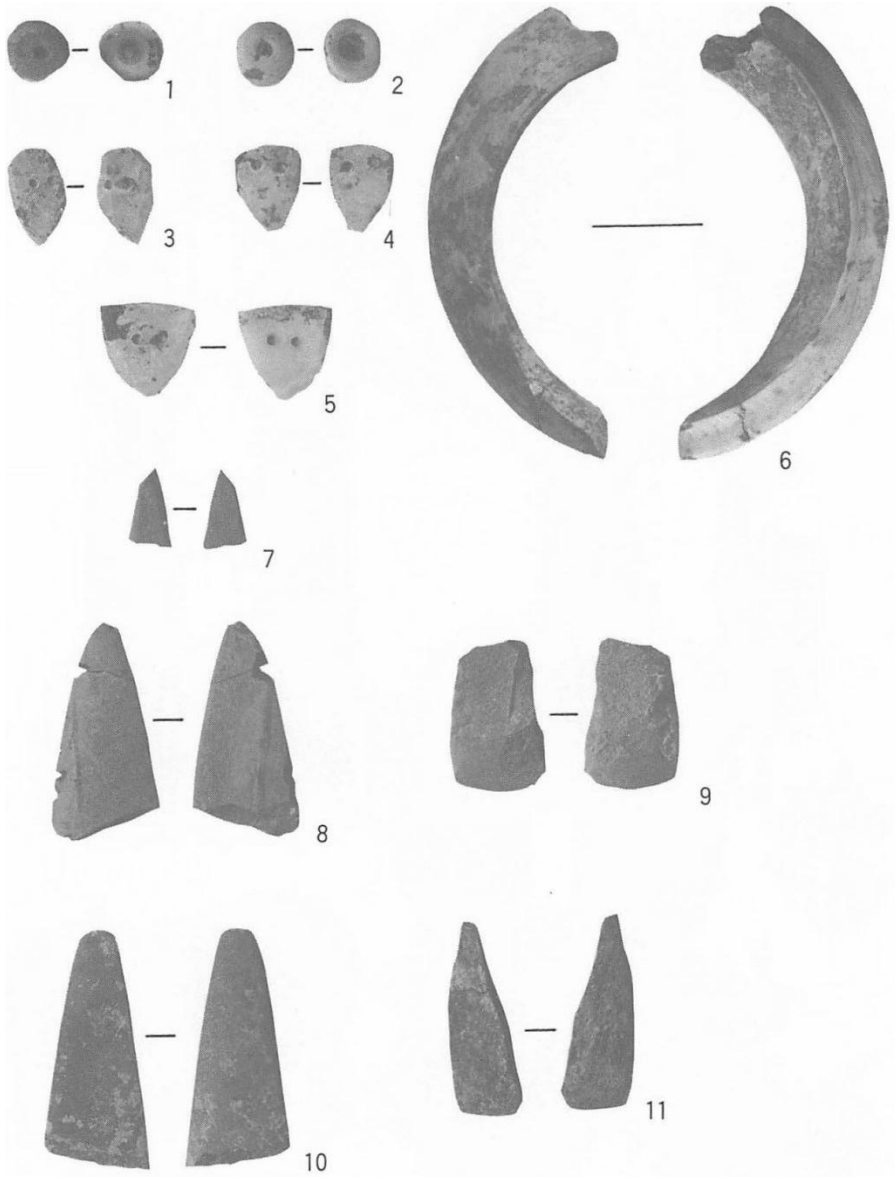



20－3．中甫―石器（第三次調査）






20－2．中甫―石器（第二・三次調査）




20－4．中甫―貝・牙製品・石器（第二・三次調査）



### (3) 貝・牙製品

貝製品は、第一、三次調査で少量検出されている。出土地点は第一、十四トレンチに限定される。

**貝輪**　第一トレンチ四区第二層下部から一点出土した。ゴホウラ製貝輪の残欠である。

**貝玉**　第十四トレンチ三、六区第四層から一点ずつ出土した。イモガイ類の螺塔先端部を研磨し、穿孔したもので、光沢がある。一センチほどの大きさで中央部に小孔をうがっている。三、六区の境付近で、牙製品と伴出した。

**三角状有孔貝製品**　第十四トレンチ一区三、四層から出土したもので、両面および側縁部を丁寧に研磨し三角状に形を整えている。真ん中より上に小孔を二つ穿ち、両面共に真珠光沢を呈する。長さ一・九センチ、ヤコウガイ製、垂飾品。

**穿孔貝**　第一トレンチ四区第二層出土。ゴホウラの背面中央に一孔を穿ったもの、人骨に沿って出土した。

**牙製品**　第一、三次調査で出土した。イノシシの牙を利用したものである。端に小孔を穿っている。連結して腕輪として使用したものかもしれない。（河口貞徳）